

1. 教授要目

I 文系教養科目

東工大立志プロジェクト (Tokyo Tech Visionary Project)

° 鈴木 悠太 准教授 柳瀬 博一 教授 山本 貴光 教授 三ツ堀 広一郎 教授
薩摩 竜郎 准教授 岡田 佐織 准教授 河村 彩 助教 他 1-1-0 1Q

新入生全員の大学生活のスタートとなる必修科目である。

東工大の教育は、世界をリードし、変革していく人材を生みだしていくことを目標としている。そのためには自分の専門分野の知識や能力だけではなく、広く世界を知ること、そして深く自分自身を知ることが必要である。

現代世界に存在するいかなる問題にチャレンジし、どのような問題意識を持って、自分の中の隠された可能性を開花させ、具体的に行動していくのか。科目名にもあるようにひとりひとりがいかなる「志」を立てて進んでいくのかが問われている。

本講義は講堂での大人数講義と少人数クラスでの演習を有機的に組み合わせながら、世界が抱える問題を知り、仲間との協働の中で自分も活かし仲間も活かすような場作りを学び、大学での今後の学びにつながる展望を得ていく。大人数講義では、各界で活躍するゲストスピーカーの話を聴き、いま社会で何が起きているのか、知的世界で何が問われているのかを知る。少人数クラスの演習では、グループワークを通じて自発的に考え、問題を発見し、他者と合意形成するためのスキルを修得する。演習の最終回では、各グループで立てたテーマをめぐってプレゼンテーションをおこなう。また書評執筆のワークショップを通じて、本の読み方を身につけ、本に対する批評眼を涵養する。

本講義は、リベラルアーツ教育の必修コア科目のひとつであり、そのスタート地点に位置づけられる。本講義の後に様々な分野の講義を履修し、3年次での「教養卒論」でひとりひとりの成果を総括するに至る東工大のリベラルアーツ教育は、各自の目標に向かって志を立てるプロジェクトとしてとらえることができるだろう。そのプロジェクトの出発点として、そこに必須の知的潜在力を掘り起こし、社会的視野を広げること、そして学びに必要なコミュニケーションとプレゼンテーションのスキルを高めることが本講義のねらいである。

教養卒論 (Liberal Arts Final Report)

° 室田 真男 教授 弓山 達也 教授 三ツ堀 広一郎 教授 小泉 勇人 准教授
安德 万貴子 准教授 福留 真紀 准教授 岡田 佐織 准教授 毛塚 和宏 講師 他
1-1-0 3Q, 4Q

学部での教養教育の出口となる必修科目である。自身の「学びのストーリー」を描いてもらう。これまでに学んできた教養が、今後学んでいく専門科目や自身の将来ビジョンにとってどう生きてくるのか、社会にどう活かせるのかについて、自身で設定したテーマに沿って 5,000～10,000 字にまとめる。小グループ単位で相互にレビューしながら、大学院学生の指導を受けながら執筆を進める。書いた文章を仲間に批判・添削してもらいながら仕上げることを通して、自分の考えを文章にまとめる楽しさ・苦しさを体験してもらいたい。

哲学A (Philosophy A)

山本 貴光 教授 1-0-0 4Q

「哲学」とはなんですか。「哲」の「学」という字の組み合わせからは、いったいなんなのか、ちょっとイメージし

づらいかもしれません。哲学は、天文学や数学と同じように、古代から現代まで、とても長い歴史をもつ学問の一つです。そして、ひょっとしたらそんなふうには見えないかもしれませんが、私たちの日常から社会や歴史、あるいはさまざまな学術ともおおいに関係をもつものでもあります。この入門篇となる講義では、人工知能やゲーム、漫画やラノベなど、身近なものを材料にして、みなさんとともに哲学を試みてみましょう。それは「問い」を創ることと深く関係していて、まるで他人事ではない次第が分かるはずです。予備知識は要りません。ただし、好奇心をお忘れなく。

芸術 A (Art A)

伊藤 亜紗 准教授 1-0-0 3Q

本講義は、古代から 19 世紀までの西洋美術の大まかな流れを知るための導入的な科目です。パルテノン神殿、ゴシック建築、ミケランジェロ、レンブラント、マネなどの主要な作品を鑑賞しながら、西洋社会がどのような価値観を重視し、また芸術にどのような役割を期待してきたのかも考えます。教員による一方的な授業ではなく、グループワーク等学生のみなさんの積極的な参加によって授業を進めていきます。

本講義のねらいは、ふたつあります。ひとつは、西洋文化を理解する上で不可欠な基礎的教養を身につけること。もうひとつは、自分の感じたことや考えたことを説得的に伝えるコミュニケーション力も身につけることです。

文化人類学 A (Cultural Anthropology A)

上田 紀行 教授 1-0-0 2Q

文化人類学とは他文化のあり方を知りながら自文化を知る、他者を理解しながら自分自身の理解を深める学問である。本講義は文化人類学への入門であり、文化が異なるといかに私たちの考え方、世界観、行動様式が違ったものになるかを知り、自分自身のこれまでの生きてきた世界の見直しと、多様な世界への感性を養う。受講者どうしによるワーク、ディスカッションなども取り入れて、実際に他者を理解し、自分自身を深める機会を作りたい。

文学 A (Literature A)

磯崎 憲一郎 教授 1-0-0 4Q

本講義では、小説という表現形式の独自性・優位性を学ぶ。

小説は、「文字で書かれた伝達手段」でありながら新聞記事や評論とは違う、また、単なる物語（ストーリーテリング）でも、情報や教訓でもない。芸術としての小説の独自性を、音楽や映像といった他の芸術とも比較しながら、構造的に分析・検証する。

本講義のねらいは、じっさいに「小説（作品）を読む」前の準備として、学生が持っている「文学作品は難解なもの、高尚なもの」といった権威主義的な小説観を取り払い、「そもそも、小説とは何なのか？」を、自らの頭で考えさせる所にある。

歴史学 A (History A)

福留 真紀 准教授 1-0-0 3Q

この講義は、「歴史学」の入門編です。「歴史学」とはどのような学問なのか、多方面から考えます。

宗教学 A (Religion A)

弓山 達也 教授 1-0-0 4Q

本講義では宗教学の基本を学ぶ。特に現代社会における宗教の役割や機能に注目しつつ、宗教観、カルト問題、宗教と自分探しを扱う。

コミュニケーション論 A (Communication A)

中野 民夫 教授 高尾 隆 教授 1-0-0 2Q

「立志プロジェクト」の少人数グループワークの精神を受け継ぎ、人と人との生身のコミュニケーション能力の向上を目指す。人は社会的な生き物であり、人と人が一緒に考えたり、学んだり、創ったりすることは、私たちの根源的な喜びに通じる。今後あらゆるところで人とやりとりしながら生きていく上で、対人コミュニケーション力は不可欠である。本講義では、参加体験型のワークショップを通して、コミュニケーション力の向上を図る。

ねらいは、自己紹介、インタビュー、対話、プレゼンテーションなどの体験を通して、楽しみながらコミュニケーション上手になってもらうこと。

教養特論：多文化共生論 (Special Lecture :Social and Cultural Diversity)

佐藤 礼子 准教授 1-0-0 2Q

多文化化が進む日本の状況を知り、多様性のある社会とは何か、多様な人々が共生するにはどのようなことが求められるかを考える。文化・民族・宗教が混在する海外の事例も取り上げて考察する。講義では、異文化間コミュニケーションの概念と方法論を用いたグループワークやディスカッションを行い、異なる背景や文化をもつ人々に対話するコミュニケーション能力を身につけることを目指す。

教養特論：言語と文化 (Special Lecture : Language and Culture)

° 赤間 啓之 准教授 佐藤 礼子 准教授 山元 啓史 教授 1-0-0 3Q

本講義は、言語学 A、言語学 B、言語学 C の導入科目として、学生が言語と言語学に関心をもつ機会を提供する。言語学の分野から三つ選び、それぞれの分野で興味深いトピックスを問題として取り上げ、学生の討論と実習によって講義をすすめる。応用言語学の回では、言語の習得や外国語学習の諸要素を取り上げ議論する。音韻論の回では言語の音声と音韻をについて扱い、言語音はどのように記述されてきたのか、実際に発音することで理解する。意味論の回では、言語の恣意性や仮想動作など言語のデリケートな問題を取り上げる。

この講義の狙いは言語学に関する本質的な洞察力を身に付け、関連する言語学関係の授業科目履修の準備をし、学生がより体系的・網羅的な言語科学への第一歩を踏み出すことにある。

外国語への招待 1 (Introduction to Foreign Languages 1)

° 戦 暁梅 准教授 安徳 万貴子 准教授 三ツ堀 広一郎 教授 山崎 太郎 教授

劉 岸偉 教授 渡辺 暁 准教授 河村 彩 助教 金澤 修 非常勤講師 1-0-0 2Q

初回はガイダンスとシンポジウムによる導入として、複数の担当教員が自らの体験に基づき、外国語を学ぶ意義と楽しさについて語り合い、二週目からはそれぞれの外国語を専門とする教員が、言語の背景となる文化、地理、社会、歴史などの紹介も含め、各国語について 1 回ずつリレー形式で講義する。

本講義は翌年度、英語以外の新たな外国語学習を始める学生たちに、その前提となる考え方を紹介し、外国語を学ぶ面白さを伝えることを狙いとする。外国語を知ることは、自分の発想を変え、その言語を基底に成り立つ異文化に分け入っていく道のりでもある。本講義を通して、受講者は、どの言語も単なるコミュニケーションの道具ではなく、その言語圏の文化や歴史の結晶であり、それぞれの地域の人々の世界観を反映するものであると実感することになる。

外国語への招待2 (Introduction to Foreign Languages 2)

戦 暁梅 准教授 安德 万貴子 准教授 三ツ堀 広一郎 教授 劉 岸偉 教授

山崎 太郎 教授 渡辺 暁 准教授 河村 彩 助教 金澤 修 非常勤講師 1-0-0 3Q

初回はガイダンスとシンポジウムによる導入として、複数の担当教員が自らの体験に基づき、外国語を学ぶ意義と楽しさについて語り合い、二週目からはそれぞれの外国語を専門とする教員が、言語の背景となる文化、地理、社会、歴史などの紹介も含め、各国語についてリレー形式で講義する。(ドイツ語・フランス語・スペイン語・中国語・ロシア語・古典ギリシア語・ラテン語のうち三つの言語について2回ずつ講義。)

本講義は翌年度、英語以外の新たな外国語学習を始める学生たちに、その前提となる考え方を紹介し、外国語を学ぶ面白さを伝えることを狙いとする。外国語を知ることは、自分の発想を変え、その言語を基底に成り立つ異文化に分け入っていく道のりでもある。本講義を通して、受講者は、どの言語も単なるコミュニケーションの道具ではなく、その言語圏の文化や歴史の結晶であり、それぞれの地域の人々の世界観を反映するものであると実感することになる。

表象文化論 A (Studies of Culture and Representation A)

北村 匡平 准教授 1-0-0 2Q

表象文化論とは、美術史や哲学、文学や人類学など個別の専門領域を横断しながら「表象」としての文化現象を捉え返す、脱領域的な学問である。本講義では、「見ること」に深く関わる近代以降の文化について、テーマごとに考えてみたい。具体的には、「崇高」という美学的カテゴリーから精神史としてのマニエリスム、東西の建築様式から造園術、博覧会からディズニーランド、身体文化史からハリウッドのセレブリティ文化まで、幅広く議論していく。ただし、基礎的な設置科目であることを考慮し、なるべく平易な言葉で解説する。

授業では、さまざまなヴィジュアル・イメージを見ながら、人びとの創造的営みを通じて文化を考察していく。受講者には、分析対象となるイメージについて主体的に思考し、グループで意見を交わしてもらう。したがって、積極的な議論への参加が期待される。本授業の目標は、①表象文化論という学問を愉しむこと、②横断的に文化現象を捉える方法を身につけること、③現代の諸現象に対して歴史的な視点を持てるようになることである。

人間文化論 A (Human Studies A) (2022 年度は休講)

未定 1-0-0 4Q

「人間」は、その個人だけでなく、さまざまな「他者」と関係においてはじめて「人間」たり得る存在である。

本講義は、「かかわりのなかの人間存在」を古今東西の詩歌を扉にして、人が自己と、他者、自然、あるいは超越的存在と、どのような関係を切り結んできたかを考える。

この授業では、単に詩を読むだけでなく、「読む」とは何かを考える。

また、口語自由詩の創作も行い、「書く」とは何かを考える。可能であれば、クラスで共同の詩集を作成する。

「読む」「書く」「聞く」「話す」を総合的に感じ、考え、表現するところまでを実践する。随時、執筆、ディスカッション、プレゼンテーションも取り入れて行う。

法学(憲法) A (Law (Constitutional Law) A)

篠島 正幸 非常勤講師 1-0-0 3Q

【概要】

日本国憲法の全体像(総論)を俯瞰した上、基本的人権の保障に関する規定を中心に説明します。

【ねらい】

日本国憲法、特に基本的人権の保障のあり方について具体的事例を交えながら紹介することにより、憲法や法律が我々の生活の中で果たす役割を理解するとともに、法律的問題解決に必要な考え方の基礎を培っていくことを狙いとします。

法学（民事法）A（Law (Civil Law) A）

金子 宏直 准教授 1-0-0 2Q

日常生活に係る法律の問題、契約、不法行為、消費者保護、裁判の仕組みなどを分かりやすく学ぶ。留学生と各国の法律事情について理解を深めるために英語の教材やディスカッション等も行う。（英語開講科目）

政治学A（Political Science A）

中島 岳志 教授 1-0-0 4Q

本講義は現代日本におけるナショナリズム問題について考察する。まずナショナリズム論の最前線の議論を講義し、その後、具体的な現象について映像・音楽・マンガなどを使用しながら解説する。ポイントは「不安型ナショナリズム」。社会が流動化し、安定的な社会基盤が失われる中、なぜナショナリズムが歪な形で勃興するのかを考える。さらに「不安型ナショナリズム」現象と連動するセカイ系アニメの分析などを通じて、現代の不安の性質を内在的に理解し、その政治的解決法を考察する。

本講義のねらいは3つある。一つはナショナリズムについての基礎知識を身につけること。二つ目はナショナリズム勃興の背景となる現代社会の特徴を把握すること。三つ目はその解決方法を政治学的に考えること。その過程で、受講生自身が「いかに生きるのか」という問いを深めることを期待する。

国際関係論A（International Relations A）

川名 晋史 准教授 1-0-0 2Q

なぜ、日本と米国は「同盟」関係にあるのか。なぜ、日本には米国の基地が存在するのか。そしてそれが沖縄に集中しているのはなぜか。本講義は、戦後日米関係のレンズをとおして様々な Whys を捉えていく。さらに、それらを今日の国際情勢（時事問題）と関連付けることで、国際政治と国内政治が抱える相克、日米の外交・安全保障政策の課題を浮かび上がらせる。

本講義のねらいは、受講者が国際関係論やグローバル・イシューに関心を持ち、それを主体的に学習するための問題意識を涵養することにある。

心理学A（Psychology A）

永岑 光恵 准教授 1-0-0 3Q

本講義では、心理学入門として心理学の歴史から最近の研究成果にわたって概説する。特に、多岐にわたる分野の中から知覚、記憶、感情について取り上げる。併せて、心のメカニズムについての仮説を立て、実証していく心理学的な研究方法（実験や調査）についても講義する。

講義では、グループワークやグループディスカッションなども取り入れて、「人間とは何か」「人間の心とは何か」を考察し、人間理解を深めることを目的とする。

社会学A（Sociology A）

西田 亮介 准教授 1-0-0 2Q

社会学の基本的な考え方を理解し、その思考法をとおして、現代社会についての理解を深める。また、その背景として

の社会学史について、理解する。

教養特論：現代社会の課題とコミュニケーション(Special Lecture：Social Issues and Communication)

久地 楽 雅也 非常勤講師 1-0-0 3Q

【概要】 東工大出身で株式会社博報堂の現役社員による、リレー講座。人間の生活には、現代社会の様々な課題が潜んでいる。これを、仕組みやアイデア、コミュニケーションで解決している事例を取り上げ、その実践的な思考と発想を学ぶ。最終ゴールは、現代社会の課題解決を提案するレポート制作。

【自問自答の対話力】 各講師は、実践的なレクチャーを通じて、東工大生がもつべき知見や視点を提供。質疑応答やグループワークで学生を支援する。学生は、他問自答（正答のある「答案」）ではなく、自問自答（正答のない「提案」）で対話を高めていく経験を積む。

【課題解決の3つの力】 現代社会の課題解決に重要な3つの力、すなわち ①自問を立てる力 ②構想を描く力 ③自答で動かす力 を学ぶ。この3つの力は、大学生活を充実させ、社会人になってからも、自分で課題を探り、ビジョンを描き、実践へ踏み出す土壌になる。この「3つの力」と「対話力」で、授業と提案レポートに挑み、自分と人類の未来を切り開いてほしい。

（注） 株式会社博報堂は、創業1895年、国内第2位の大手広告会社。広告・マーケティング・イノベーションの領域で、企業や社会の課題解決を行っている。企業フィロソフィーは生活者発想。

経済学A【1】(Economics A【1】)

江原 慶 准教授 1-0-0 3Q

本講義では、経済学という学問への導入として、経済学の成り立ちについて学びます。一口に経済学といっても多様であり、全体をカバーすることはできませんが、すべての経済学のおおもととなっている古典派経済学について、その形成と概要を講義します。その後、「経済学B」「経済学C」で学ぶマルクス経済学の形成と発展について講義します。

本講義のねらいは、経済学の研究史を学ぶことで、なぜ経済学が、物理学などの自然科学と異なり、多様にならざるを得なかったのか、その経緯を理解することにあります。それは、現実の社会が多様であらざるを得ないことを反映しています。（日本語開講科目）

※「経済学A」は2クラスあり、【1】が日本語開講科目、【2】が英語開講科目です。

経済学A【2】(Economics A【2】)

楊 起中 非常勤講師 1-0-0 2Q

この講義は予備知識の有無にかかわらず、経済学に関心のあるすべての学生を対象としている。講義ではミクロ経済学、マクロ経済学、そして計量経済学の初歩知識を扱う。ミクロ経済学は個人、家計、企業などの最小単位の経済主体を扱う分野であり、マクロ経済学はGDPや失業率などの経済活動を集計した、一国全体の経済現象を扱う分野である。また、計量経済学では経済理論に基づいて立てられた仮説の妥当性について、実際のデータを用いて検証する。いずれ分野においても具体例を用いて、より現実に近い観点から経済学の基本を学んでいく。学生たちが日常生活における様々な物事に対して、経済学者の身になって考えてもらえるように導くのが本講義の目標である。（英語開講科目）

※「経済学A」は2クラスあり、【1】が日本語開講科目、【2】が英語開講科目です。

教養特論：ファッション論 (Special Lecture: History of Fashion)

高村 是州 非常勤講師 1-0-0 4Q

現代社会において、衣服は単に身体を守る物ではなく様々な役割を担っている。

本講義ではファッションがどのようにして生まれ、社会の中で発展し、これからどのように変わっていくのかを学び、「ファッション」という概念について一緒に考える。衣食住という言葉があるように、「衣」は人間の生活において根幹に関わる部分でありながら、自己の全身を自ら見ることができないため、客観性を欠きやすい分野である。しかし、自分を視覚的にプレゼンテーションしていくことは社会生活を送る上で重要であり、その一助としてのファッションの活用方法についても考えていく。

教養特論：東南アジア (Special Lecture: Southeast Asia)

堀場 明子 非常勤講師 1-0-0 3Q

本講義は、日本との関係が深い東南アジア諸国についての理解を促すものである。東南アジア地域の人々と社会、政治、文化について、さまざまな角度から概観する。植民地支配の歴史、国民国家の形成、環境問題、地域紛争など実社会における問題と密接にかかわるテーマを取り上げる。

本講義のねらいは、グローバル社会で生きる上で必須となっている異文化理解の促進と、違いを受け入れる寛容の精神の醸成である。東南アジアを知ることを通して、多様な生き方、考え方を知り、他者との協働につなげてほしい。(英語開講科目)

メディア論 A (Media Studies A)

柳瀬 博一 教授 1-0-0 4Q

本講義では、「メディア」の意味と意義について学ぶ。

通常、「メディア」というと、テレビ、新聞、雑誌、ラジオ、映画、書籍、広告など「メディアビジネス」を連想する向きが多い。けれども、今や、インターネットの発達、SNS やブログなど個人メディアサービスの浸透、パソコンやスマートフォンの普及で、あらゆる個人と組織がいつでもどこでも情報発信できる「だれでもメディア」時代が訪れている。この「だれでもメディア時代」を支えるのは IT や AI などの「理系の技術」である。

理系の技術が牽引する「だれでもメディア」時代。この時代における、メディアの意味は、意義は、何か？ 自らがメディアとなった個人は、組織はどう振る舞うべきか。具体的な事例をとりあげながら、考察する。

教養特論：経営学入門 (Special Lecture: Introduction to Management)

三宅 秀道 非常勤講師 1-0-0 2Q

本講義は、受講者が「経営学的センス」を身につける入り口として、産業・ビジネスについて様々な視点から考える機会をつくることを目的とする。経営についての予備知識は一切問わない。学説史的知識の獲得を過剰に重視はせず、時には時事的なトピックも題材としながら、受講者が将来には「工学・技術と経営のよい連携」を担える人材となることを支援することを意図する。

本科目のキーとなる問題意識は、「その人工物（これには有形財はもちろん、情報サービスなど無形財も含まれる）にはなぜ価値があるのか」という問いである。ここから出発して、技術と文化、市場創造、ブランドと歴史、少子化と

企業家精神、地場産業、問題発明などビジネスの多様な側面を理解し、受講者自身が構想力を発揮して新たなビジネスを創造する地力を涵養することが理想である。

教養特論：障害学（Special Lecture: Disability Studies）

木下 知威 非常勤講師 1-0-0 4Q

この講義は、教育学、文学、美術、工学、歴史などの専門領域を包括しながら「身体障害」を再考する内容です。そこで、身体障害に深く関わるテーマをいくつか設定します。

身体障害とは何でしょうか。まず、この視点から考えていきます。その上で、障害者はどのように定義されているのか、また手話や点字、車椅子などの支援技術、映画や社会における身体障害者のイメージなど幅広いテーマを設定し、全体で議論をしていきます。この講義は教養科目であることから、平易な言葉で解説します。

受講者には設定されたテーマについて、毎回のコメントに基づいて議論してもらうため、積極的な参加が望まれます。なお、担当教員はろう者（※）なので、手話通訳、音声認識アプリ、筆談、タイピングなどの幅広い視覚的なコミュニケーション方法を用います。みなさんにとって、この講義は新たなコミュニケーションのモードを習得する絶好の機会になるでしょう。

講義のねらいは、身体障害についての教養と思考の軸をつくっていくことです。

※ろう者：生来、耳の聞こえないものであり、手話を主要な言語とするもの。

教養特論：アメリカ学（Special Lecture: American studies）

赤羽 早苗 准教授 1-0-0 3Q

本科目は、アメリカ社会における白人至上主義に基づく社会的構造と、奴隷制度以前から現代にまでも続く社会問題を、歴史的考察を通し検討する。特に、人種、制度的人種差別を取り扱う。

統計学A（Statistics A）

毛塚 和宏 講師 1-0-0 3Q

近年、ビッグデータの隆盛とともに統計学が注目されつつある。なぜなら、ビッグデータを含む、人や社会を対象にしたデータを取り扱うには、統計学の知識や素養が必要であるからである。

本講義は、社会科学における統計学の応用を取り上げながら、統計学の基本的な概念（記述統計、相関、回帰、検定・推定など）を解説する。本講義を通じて、履修者は統計学の基本的な概念を身に付け、それら駆使して社会問題にアタックする能力を養うことができる。

科学史A（History of Science A）

多久和 理実 講師 1-0-0 3Q

本講義は、科学史を現代の科学を取り巻く状況を相対化する視点として提供する。

科学知識を学び研究する上で、科学活動をよく知る必要がある。現在当然のように受け入れられている科学活動（科学者という職業が存在すること、理論と実験が両輪となって進歩すること、学会で成果を発表すること、など）は昔から当たり前だったのだろうか？そうでなければ、どのように生じてどのように当たり前になったのだろうか？現在価値が置かれているものを相対化することで、変わり続ける「科学」という分野で活動し続けていくための視点を育む。

技術史 A (History of Technology A)

河西 棟馬 講師 1-0-0 4Q

本講義では、歴史的なアプローチから「技術者（エンジニア）」とは何者かを検討していきます。人類史は常に何らかの技術と共にありましたが、伝統的職人層と区別される「技術者」という集団が誕生したのは産業革命及びフランス革命期の西洋でした。ここでは特に、日本の技術史に多大な影響を及ぼしたフランス、イギリス、ドイツ、アメリカを中心として、各地域における「技術者」という職業集団形成の歴史を概略し、これらを踏まえた上で日本における技術者という存在について検討していきます。

「技術者」のあり方は時代・場所によって驚くほど多様であり、現在も大きな変化の過程にあります。本講義の目標は、受講者が過去を材料としてこの職業について多面的に理解できるようになること、及びそうすることで受講者各自が自らのキャリアについて考えるための材料を提供することにあります。

科学技術社会論・科学技術政策 A (Science and Technology for Society A)

調 麻佐志 教授 1-0-0 2Q

科学や科学的事実とはどのようなものと考えられるのか。その「事実」の形成に研究者や論文がどう作用しているのか。翻って、「事実の形成」という観点から、研究者にはどのような行動が求められるか。そのような問題に関する入門的な内容について講義する。

本講義のねらいは、

- (1) メタな視点から科学を見る
- (2) 研究の内容だけでなく研究者の役割や責任について基本的自覚を持たせる
- (3) 科学技術社会論への関心を高める

の3つである。

科学技術倫理 A (Ethics in Engineering A)

眞嶋 俊造 教授 1-0-0 3Q

科学技術と社会・環境との関係を多面的に考察し、現代の高度科学技術社会における科学者・技術者として重視すべき価値を共有する必要性を研究倫理の視座を通して理解する。科目全体を通して、「やってはならない」ことを強調する予防倫理だけでなく、科学者・技術者として「何ができるのか」を考える志向倫理を重視する。また、倫理的科学者・技術者が、社会の福利に貢献するだけでなく、自らの「よく生きること (well-being)」を高めることができることを理解する。学生として、そしてこれからの高度専門職業人として「よく生きること」についても考察する。

科学哲学 A (Philosophy of Science A)

田子山 和歌子 非常勤講師 1-0-0 4Q

本講義は、17, 18 世紀ヨーロッパにおいて発展した自然科学の方法論を、科学思想史（キリスト教思想史、哲学史も含む）のコンテキストから扱う。

本講義は、1. 「自然法則」、「実験と経験」、「経験主義」、「時間・空間」、「技術」など、近代自然科学の方法論ないし基礎テーマを各授業で扱い、かつ、2. それらのテーマに通底する、科学と宗教の関係をめぐる文化的・歴史的基盤を概観することをねらいとする。

社会モデリング A (Social Modeling A)

下川 拓平 非常勤講師 1-0-0 3Q

社会選択理論の導入部分へといたるストーリーを提供するという目的ものと、その理論のひとつのマイルストーンである Kenneth Arrow の仕事(主として不可能性定理)の数学的理解とその意味解釈を提供する。この理解をもとに、社会的意思決定ルールが「合理的」であるとは何を意味するのかという問題意識の一つの重要な結論である「中村ナンバー」についての議論、その詳細を講義する。なお、内容は数学的記述と展開を必要とするものであり、前半部分で(当然ふまえておくべき)言語としての数学の復習をしていただく事となる。

意思決定論 A (Decision Making A)

猪原 健弘 教授 1-0-0 2Q

意思決定論における重要な意思決定問題を取り上げ、解決策、解決策の利点や欠点、そこから得られる示唆を、ディスカッション、グループワーク、講義、演習を通じて検討する。

意思決定論が扱う意思決定問題の代表例と解決策、および、意思決定論の基本概念と基礎的な知見を理解・修得させると同時に、意思決定論への興味を喚起することが本講義のねらいである。

言語学 A (Linguistics A)

山元 啓史 教授 1-0-0 4Q

言語学の入口として、私たちが日々触れている言語の具体的現象を取り上げて、そこにはどんな言語の不思議が詰まっているのか、身近の経験を言語の科学として楽しむ授業を行う。この授業はディスカッションを中心に進められる。予備知識は不要。必要なのは言語に向き合う素直な態度と食欲な好奇心だ

学びのデザイン (Learning Design)

室田 真男 教授 1-0-0 2Q

大学入学前までの学びと、大学での学びは何がどう異なるのだろうか。大学で学ぶことの意味や、大学生の目指すものは何か。この講座では、大学生の学びを学習科学・教育工学・認知心理学の諸理論を用いて理論的に考える力を養うことを目的に講義する。大学生生活4年間だけでなく、社会人として、「学ぶ」方法や、「教える」方法についても触れながら、自らの今後の学習についてデザインできる能力を養う。

教養特論：技術と美術の哲学 (Special Lecture: Technology and art)

BEKTAS YAKUP 助教 1-0-0 4Q

技術とは何か？美術とは何か？これらは、互いに概念的、歴史的にどう関係しているのか？美術と工芸(技術)が同じであった時代があったのか？このコースは、ハイデッカー(1889-1976)の哲学、特に彼の2つのエッセー “The Question Concerning Technology” (1954)と “The Origin of the Work of Art” (1960)を通してこれらの疑問と概念を探究する。ハイデッカーの近代的技術の概念について議論する

それは、伝統的な古い技術を、攻撃的で制御しにくく、拡張したものであり、deinon と Sublime の概念と関連している。技術は、人類の自由の表現であり、また同時に脅威であるのか？我々は、技術なしに世界を体験できるか？美術なら、技術とは異なる、世界を自由に体験する方式を提供できるのか？ハイデッカーがしたように、ゴッホの「靴」を鑑賞し、技術と美術について考える。(英語開講科目)

教養特論：ミュージアムから学ぶ科学・技術・文化コミュニケーション

(Special Lecture: Thinking and learning through museums)

BEKTAS YAKUP 助教 1-0-0 2Q

博物館は、世界の文化遺産を保存し解説する場です。現代では、その数も容量も以前より増えています。多様な形で発展し、常に好奇心と学びの中心としての位置を保っています。この新しいコースは、その主題と源泉を探り、体験して直接考え学びたいと考えています。博物館がどんなディスプレイをするか、芸術・科学・技術をどう語るかだけでなく、来館者が対象の展示物や芸術からどう学ぶかについて探究したいと考えています。様々な規模の博物館や美術館を見て、幅広い芸術・工芸・標本を評価をし、授業で議論し、短いレポートを書きます。（英語開講科目）

教養特論：未来社会デザイン入門（Special Lecture: Introduction to the Design of Future Society）

柳瀬 博一 教授 治部れんげ 准教授 1-0-0 3Q

本講義では、科学技術と人間社会の未来を念頭に、科学的、現実的、かつ理想的でもある未来社会をデザインする視野と想像力をグループワーク型の授業で育てる。

個人の夢や目標、科学技術と社会課題、少子高齢化など日本の課題、SDGsに象徴される世界の課題を踏まえ、「こんな未来を創りたい」、具体的には、2050年学生自身が50歳になったときに、「生きていたい未来社会像」を明らかにすることを目指す。

未来社会論 A（Studies on Future Society A）

治部 れんげ 准教授 1-0-0 2Q

本講義では、子どもの視点で「未来のあるべき社会」を考えます。世界と日本の子どもが置かれた現状をデータ、研究、事例で把握して、経済格差の現状を知り、社会政策の課題を把握します。皆さん自身が子どもだった約10年前と今を比較し、今から10年後、皆さんが大人として将来の子ども世代のために何ができるか、長期的かつ広い視点を持って考えていきましょう。企業の社会貢献やESG経営、政策起業家や地域マネジメントの事例を学ぶと共に、ソーシャル（社会）とサイエンス（科学）それぞれが、このテーマで何ができるか自分の考えを説得的に示すことを目指します。

教養特論：スポーツ科学（Special Lecture: Sports Science）

丸山 剛生 准教授 1-0-0 4Q

スポーツの競技力向上には、様々な科学・技術が貢献している。ここでは、バイオメカニクスとスポーツ工学に関連する事象を扱う。スポーツにおいてどのように身体を動かせば効率よくパフォーマンスを向上させることができるのかスキルとノウハウを発見するバイオメカニクスと、身体パフォーマンスの向上を支援するスポーツ用具の開発および身体運動の最適化を目指すスポーツ工学とが、どのようにスポーツ競技力向上と関連したのかについて考えていく。

本講義のねらいは、本学で学ぶ工学と理学の学問がスポーツに貢献することを学び、自身が目指す専門分野を俯瞰的に捉えることである。

哲学B（Philosophy B）

山本 貴光 教授 2-0-0 1Q

「哲学」と呼ばれる学問は、発端となった古代ギリシアから数えても、2500年以上の歴史を持ちます。その長い歴史のなかで、哲学ではさまざまな問題が検討されてきました。例えば、現在でも科学哲学、数学哲学、生物哲学、神経哲学、

言語哲学、法哲学、音楽哲学、歴史哲学、人工知能の哲学など、いろいろな「Xの哲学」(Xには任意の対象が入ります)が行われているところです。そこでは例えば、「脳と心はどう関係しているのか」「知能とはなんだろうか」「生命とはなにか」「美しいとはどういうことか」「幸せとはどういう状態か」といった問題が探究されています。この講義では、哲学の歴史を大きく辿り、百学が連環する様子を見ながら、いくつかの具体的な問題に注目してみます。

芸術B (Arts B, Esthetics B)

中尾 拓哉 非常勤講師 2-0-0 4Q

本講義は、20世紀美術を中心にした作品を鑑賞しながら、美術について広く考えることをねらいとしています。美術作品には、作家の考えだけではなく、時代背景や脈々と続く美術史の大きな流れが渦巻いています。しかし同時に、作品は鑑賞者一人ひとりが対峙することで、初めて存在意義をもつものでもあります。本講義では、みなさんで意見を交わしながら、そうした鑑賞体験を共有していきます。

作品を「見る」ということは、それを「作る」ということへの共感を示すことにもつながっています。パブロ・ピカソのキュビスム、現代美術の父とされるマルセル・デュシャンのレディメイドなど、20世紀を代表する未だ謎めく作品群を、美術を考える上で必要なキーワードとともに追っていきます。美術作品を鑑賞し解釈する体験は、みなさんの思考や論理性に対して大きな刺激を与えるものとなるはずです。

文化人類学B (Cultural Anthropology B)

田中 理恵子 非常勤講師 2-0-0 4Q

私たちは「自分のことは自分が最もよく知っている」と思いがちだが、自分がどのような文化のなかで生きてきたかを省みる機会はさほどない。また、誰しも「私たち」と「彼ら」という二分法で物事を語りがちだが、その「彼ら」が自分と異なる環境で育ってきたのなら、お互いどこまで理解しあえるかという問題が現代の生活には常につきまといている。だからこそ、私たちは「自己・自文化」と「他者・異文化」をつなぐ思考回路をどこかの時点で築く必要がある。そんなときこそ文化人類学の出番だ。

本講義では、近年注目を集める「芸術人類学」の議論について学びながら、アートや感性の観点から「自―他」のつながりを捉えなおす。今年度は、世界のさまざまなパフォーマンス（映像、音楽、文学など）を契機として、今日の社会問題について考える。理論的には、文化人類学に基づくグローバル・スタディーズの議論を参照しながら、具体的なテーマとしては、仮想現実、引きこもり、アイデンティティ、マイノリティ、格差、差別、食の安全、環境などについて、事例に沿って検討を進める。

新型コロナ感染症のまん延によって、現代の生き方・コミュニケーションのあり方は見直しを求められてきた。この授業を通して新たな視座を模索し、みなさんの世界を広げていって欲しい。

文学B (Literature B)

磯崎 憲一郎 教授 2-0-0 3Q

本講義では、古典から近代小説、日本の現代小説まで、個々の作品を「読む」事を通じて、「小説とは何か？」を学ぶ。

小説の起源まで遡り、古典から近代小説、現代小説まで見渡した上で、個々の作品の特徴を捉え、「小説という表現形式でなければ出来ない事を始めたのは、いつの時代の、どの作家からだったのか？」を具体的に考察し、「小説とは何か？」、実作者でもある担当教員の考え方を示して行く。文学史的位置付けや、マッピングといった客観的分析ではなく、小説本体に寄り添い、「この作品を書いている最中に、作者は何を企み、どんな頂きを目指していたのか？」を考えながら、よ

り能動的に、個々の小説を読み込んで行く。

歴史学B (History B)

福留 真紀 准教授 2-0-0 3Q

この講義では、「人」から歴史学を考えます。歴史を紡ぎだしているのは「人」です。
美術史・考古学・文学・思想史の視点にも触れながら、「人」にこだわって、分析していきます。

宗教学B (Religion B)

弓山 達也 教授 2-0-0 2Q

本講義では1980年代後半のバブル期から東日本大震災(2011年)までに見られる日本のスピリチュアル文化を理解することを目的とする。特にスピリチュアリティと社会との関係に重きを置き、スピリチュアルブームとその背景、若者の死生観、大衆文化に見られるスピリチュアリティを扱う。

コミュニケーション論B (Communication B)

中野 民夫 教授 2-0-0 3Q

本講義は、簡単な正解のない様々な課題に対して、多様な人々が「協働」で取り組むことが求められる時代に、人と人が対面して話し合うコミュニケーション力を高める。自ら良き話し手、聴き手になるだけではなく、人々が集い話し合う場を適切に創り、円滑に進行していく「ファシリテーション」の基本技を身につける。

ねらいは、今後のチームでの研究活動など、様々な人が協働する場に活かせる生身のコミュニケーション力を、楽しいワークショップ体験を通じて向上させること。

国際文化論：アジア・アフリカ (Intercultural Studies: Asia and Africa)

°三ツ堀 広一郎 教授 馮 青 非常勤講師 崔 盛旭 非常勤講師 鈴木 真弥 非常勤講師
工藤 裕子 非常勤講師 辻上 奈美江 非常勤講師 佐治 奈通子 非常勤講師
戸田 美佳子 非常勤講師 2-0-0 1Q

グローバル化の時代にあって忘れられがちな国際社会の諸相に案内する。具体的には中国、韓国、インド、インドネシア、サウジアラビア、トルコ、サブサハラ・アフリカの7カ国(7地域)に焦点をあわせながら、各国文化の民族性、歴史、伝統、社会などを概観する。各地域の専門研究に従事する7人の講師が、それぞれ独自の切り口から、オムニバス形式でこの7地域をあつかう。

本講義のねらいは、異文化理解の促進と国際意識の醸成である。一連の講義を通じて得た知識は、履修者が将来、多様な文化的出自の持ち主たちが集まるグローバルな環境で生きることになったときに、かならずや力になるだろう。

国際文化論：ヨーロッパ・ラテンアメリカ (Intercultural Studies: Europe and Latin America)

°三ツ堀 広一郎 教授 若松 功一郎 非常勤講師 梶田 裕 非常勤講師
河村 英和 非常勤講師 土田 久美子 非常勤講師 宮崎 淳史 非常勤講師
伏見 岳志 非常勤講師 田中 理恵子 非常勤講師 2-0-0 2Q

グローバル化の時代にあって忘れられがちな国際社会の諸相に案内する。具体的にはドイツ、フランス、イタリア、ロシア、チェコ、メキシコ、キューバの7カ国に焦点をあわせながら、各国文化の民族性、伝統、歴史、社会などを概観す

る。各地域の専門研究に従事する 7 人の講師が、それぞれ独自の切り口から、オムニバス形式でこの 7 地域をあつかう。

本講義のねらいは、異文化理解の促進と国際意識の醸成である。一連の講義を通じて得た知識は、履修者が将来、多様な文化的出自の持ち主たちが集まるグローバルな環境で生きることになったときに、かならずや力になるだろう。

世界文学 1 (World Literature 1)

三ツ堀 広一郎 教授 劉 岸偉 教授 戦 暁梅 准教授 安德 万貴子 准教授
渡辺 暁 准教授 河村 彩 助教 2-0-0 3Q

この講義で、学生は世界文学の主要な作品を鑑賞する。講義はまず「世界文学とは何か」を皮切りに、ドイツ、フランス、ロシア、スペイン語圏、中国の文学作品をオムニバス形式の授業で鑑賞する。

本講義を通じて、学生は世界文学の読み方を学び、各国民・民族の思考法や心性を理解し、更に文学を通じた異文化理解の仕方を獲得することができる。

世界文学 2 (World Literature 2)

三ツ堀 広一郎 教授 劉 岸偉 教授 戦 暁梅 准教授 安德 万貴子 准教授
渡辺 暁 准教授 河村 彩 助教 2-0-0 4Q

この講義で、学生は世界文学の主要な作品を鑑賞する。講義はまず「世界文学とは何か」を皮切りに、ドイツ、フランス、ロシア、スペイン語圏、中国の文学作品をオムニバス形式の講義で鑑賞する。

本講義を通じて、学生は世界文学の読み方を学び、各国民・民族の思考法や心性を理解し、さらに文学を通じた異文化理解の仕方を獲得することができる。

教養特論：オペラへの招待 (Special Lecture: Introduction to Opera) (2022 年度は休講)

山崎 太郎 教授 2-0-0 3Q

オペラは歌とオーケストラ、舞台美術と衣装、言葉と演技といったさまざまな要素が一体となって、愛と死をめぐる人々の情念と社会の複雑な様相を描き出す総合芸術である。視覚と聴覚の相乗効果には何ものにも代えがたい魅力があり、それゆえに 16 世紀末の誕生以来、貴族社会から市民社会へのヨーロッパの歴史の変遷において、娯楽と教養の対象として発展を続け、現在、世界的な舞台芸術としての地位を確立するにいたっている。本講義では代表的な作品をいくつか紹介。各作品をさまざまな角度から掘り下げ、その魅力に親しむことで、現代の私たちにとってオペラが持つ意味を考え、ひいてはヨーロッパの社会と文化の成り立ちをより深く理解するための一助とする。

オペラといえば欧米で主に富裕層のために上演される豪華な芸術であり、日本に住む学生にはあまり縁がないと一般的に思われているが、今日の日本でもさまざまな上演が行なわれ、時には学生のための特別な価格設定がなされていたりする。またオペラは何よりも テレビドラマや映画と同様、人間たちの織り成す関係や喜怒哀楽の感情を描くドラマであり、演出によってはそれが(オリジナルのト書きとは違う)現代の舞台装置や衣装という設定で示されたりもして、きわめて身近なものと感じられることもある。授業を通じて、このようなオペラの多様な在り方を紹介し、ヨーロッパの伝統文化への理解を深めるとともに、現代の私たちが生きる社会におけるオペラの意義を考えてゆきたい。

表象文化論 B (Studies of Culture and Representation B)

久保 友香 非常勤講師 2-0-0 4Q

1990年代半ば以降のデジタル技術の発展は、「自己像」に大きな変化をもたらした。「自撮り (Selfie)」という新しい行動が生まれ、近年では「自撮り」した顔でリモート授業に出席することも日常化する。

本講義では、過去約25年の「自撮り」の技術革新と文化発展の関係を追いながら、「自己像」の表象の変遷に焦点を当てる。

さらに、自画像やセルフポートレート of 歴史を学び、それをもとに、メタバースやミラーワールドにおける3次元のアバターなど「自己像」の未来について探求する。

人間文化論 B (Human Studies B) (2022 年度は休講)

未定 2-0-0 1Q

人間文化はさまざまな出会い、経験、出来事によって構成される。この講義は、それを実存的につまり、単に知性だけでなく、経験的にとらえることを目的にしている。テキストとして、近代日本思想史の古典的著作を読み解きながら、参加者個々が、自己の問題として捉え直し、語り合い、書く実践を深めていけるように構成する。随時、執筆、ディスカッション、プレゼンテーションも取り入れて行う。

教養特論: アートとデザイン (Special Lecture: Art and Design)

田中 みゆき 非常勤講師 1-0-0 1Q

アートとデザインは、本来まったく異なる役割を持ちながらも、見た目には違いが明らかでないことも多いためか、しばしば混同されがちな概念である。とりわけ、メディアやビジネス、アーティストやデザイナーのあり方の多様化に伴い、さらに境界が曖昧になっていると言えるだろう。

しかし、アートとデザインを区別し見分けることができるようになることよりも、環境問題や貧困、不平等など、複雑化するさまざまな社会問題に対してアートやデザインといった手法がどのように力を発揮できるのかを思索することこそが重要である。

この講義では、それぞれ異なった意図のもとに生み出され、社会に受容されてきたさまざまなアートやデザインの事例を通して、境界を曖昧にしている要因とアプローチの手法を考察したいと思う。また、あらゆる表現に欠かせないものとなったテクノロジーについても取り上げたい。それらの事例や考え方に触れることで、表現する／伝えるという行為、ひいては生き方の多様性について共に考え、実践する機会になればと思う。(英語開講科目)

法学 (憲法) B (Law (Constitutional Law) B)

松村 芳明 非常勤講師 2-0-0 2Q

憲法 (学) に関する最重要の知識事項の解説を行う講義である。具体的には、①立憲主義や憲法改正、平和主義、権力分立等の、専門的には「憲法総論 (統治機構含む)」と呼ばれる領域、②人権の概念や適用範囲、制限、主体等に関する「人権総論」領域、③「法の下での平等」や表現の自由のような「人権各論」領域について、重要事項をできるだけ満遍なく学ぶものとなる。

本講義の狙いは、①取り扱う事項について、受講者が、原理や意義の把握を伴った十分な理解に達すること、②見解が分かれる論点について、多角的で厚みを持った考察ができるようになることである。加えて、各知識事項や論点を、事例とともに学ぶことにより、③現実社会と憲法知識との関連を踏まえた考察ができること、も目指す講義としたい。

なお、本講義は教職等で必要になる「憲法」科目に対応するものである。

法学（民事法）B（Law（Civil Law）B）

金子 宏直 准教授 2-0-0 4Q

民法や民事裁判手続法を含めた、民事法について基本的な学習を行う。法律を学習するのに必要となる六法の使い方も身につけることで、将来、自分の仕事に関連する法律の理解にも役立てることができる。

政治学B（Political Science B）

中島 岳志 教授 2-0-0 2Q

政治学の基礎について、現代思想の成果を取り入れ、論じる。理論的側面を講義した上で、具体的な現代社会の課題について論じる。政治学とは、異なった能力・価値観・意見・慣習をもった他者同士が、ひとつの場所でいっしょにやっていくための方法を考える学問である。重要なのは自分とは異なる他者の存在を前提とすること。他者とわかりあうことは、そう簡単なことではない。時にもどかし、時にイライラする。しかし、何とか合意形成しなければ、社会の秩序を保つことはできない。では、どうすればいいのか。その試行錯誤の軌跡と思考を講義し、現代社会への展望を論じる。

本講義のねらいは2つある。一つは政治学の基礎を習得すること。二つは現代社会の課題に対して、政治学的解決の方法を身につけること。この能力を身につけることで、異なる他者との共存のあり方を模索することが可能となる。

国際関係論B（International Relations B）

川名 晋史 准教授 2-0-0 1Q

今日、全ての国家は主権の上では平等ということになっているが、歴史的にみれば、そのような世界秩序のあり方は普遍的ではない。そこで本講義では、われわれが今日考えるような「国際関係」がいつどのような形で始まり、どのような推移を経て今に至っているのかを考えていく。とりわけ、戦後冷戦の中心舞台であったヨーロッパにおいて、米ソの勢力争いは何をめぐってどのように行われたのか。またその冷戦に大国がどのように関わり、それをどのように克服しようと試みたのか。こうした観点から、米ソの大国間政治の相互作用の過程を分析する。

本講義のねらいは、「現在」を普遍のものだと考える固定的な視座を打ち砕くことにある。

心理学B（Psychology B）

柴崎 光世 非常勤講師 2-0-0 2Q

本講義は、心理学の主要な領域のうち、学習、記憶、知能、パーソナリティ、社会的認知、社会的行動、神経心理学を取り上げ、各領域の基礎的な概念、理論、研究成果について説明する。特に、心と脳との関連性について検討する神経心理学についてはやや多くの時間を割き、心の生物学的基礎や各種高次脳機能障害、神経心理学的支援について今日的话题を含めながら講義を進める。また、個々の領域の研究史や研究方法についても適宜触れていく。

本講義を通して、科学としての心理学の概要を知り、心理学的な観点から人間の行動に対する理解を深めることをねらいとする。

社会学B（Sociology B）

西田 亮介 准教授 2-0-0 1Q

本講義では、社会学の基本的な概念、発展の歴史、連字符社会学の展開、方法、特徴等を網羅的に学習する。それらを通じて、社会学的な思考の特徴、課題、その他諸社会科学との関係の基本的な概要を理解することを目的とする。

教養特論：現代社会論 (Special Lecture: Contemporary Society)

池上 彰 特命教授 2-0-0 1Q

憲法や安保、日米関係、メディアリテラシー、イスラムやアメリカ大統領選挙、北朝鮮など現代に生きる学生たちに、社会に出てから必要とされる現代社会の認識力を身につけてもらうことを一義的な目標とする。

経済学B (Economics B)

江原 慶 准教授 2-0-0 3Q

本講義では、マルクス経済学に基づく資本主義の基礎理論の前半を扱います。まず資本主義における市場に焦点を当て、その構造を分析するために必要となる、商品・貨幣・資本といった概念について説明します。特に、商品の要件や貨幣の役割、資本という概念の捉え方を学びます。そうした概念を踏まえて、資本主義の市場の構造を分析し、さらにその構造が変容する可能性について、理論的に検討します。

本講義のねらいは、世界で最も厚い研究蓄積をもつ日本のマルクス経済学の成果を活かしつつ、それをアップデートすることで、常識化している需給均衡的な市場理解だけが唯一の経済学ではなく、もう一つの首尾一貫した市場理論が構想できることを示すことです。それにより、経済社会がなぜ人によって異なって見えてしまうのか、合理的に説明するための手がかりを得ることができます。

教養特論：国際関係とコミュニケーション (Special Lecture: International Relations and Communication)

パトリック・ハーラン 非常勤講師 2-0-0 3Q

国際化が急ペースで進む中、日本はある意味、もう島国ではないといえよう。国民も一つの国に所属して活動する“日本人”というよりも、世界を視野にいれ、グローバルで活躍する“国際人”にならないといけない時代だ。本講義は国際関係理論の基本を学んだ上、世界の現状を見て日本や日本人の可能性と役割を検証する。温暖化、移民や難民、テロ、情報社会、集団的自衛権、領土、捕鯨、TPP などなど、話題沸騰中の課題を取り上げながら理論を応用する。レクチャーの他、ディスカッションやプレゼンを通して学生同士が刺激しあう場を提供する。世界と接するときの心構えやコミュニケーション術も学習し、セオリーや基本知識をもって世界を相手に議論できる、21 世紀型の人材育成を目指す。

メディア論 B (Media Studies B)

柳瀬 博一 教授 2-0-0 3Q

本講義は、現代メディアの基礎知識を学んだ上で、科学技術に対するメディアとジャーナリズムの報道の意義について考察する。

21 世紀は科学技術が主役となりやすい時代である。地球環境、医療、経済、社会や政治やエンタテインメントにいたるまで、科学技術が関わらない分野はほとんどない。

科学技術そのものや科学技術がもたらした事象はメディアの取材対象になる。さらに、科学技術に関わる者はメディアを介して一般に向けた発言や説明を積極的に求められる。

ゆえに、科学技術の道を歩む者は、研究畑で仕事をするにせよ、産業界に身を投じるにせよ、メディアビジネスの一員となるにせよ、科学技術をメディアはどう封じるべきか、という命題に向き合うときがいずれ訪れる。

本講義では、現代メディアの基礎を学んだのち、現実にかきた科学や技術にまつわる事故や事件などの報道を取り上げて、科学や技術とメディアとの関わりについて考察する。また、科学技術の当事者が情報発信を行う、「科学技術ジャー

ナリズム」の基礎についても学ぶ。講義には、実際に科学技術報道に従事する現役メディア関係者やジャーナリストを招く予定である。

教養特論：データとトピックで知る日本経済（Special Lecture: Japan's economy from the view of the data and topics）

柳瀬 博一 教授 倉品 武文 非常勤講師 安西 巧 非常勤講師 上田 敬 非常勤講師

久保田 啓介 非常勤講師 西條 都夫 非常勤講師 齊藤 徹弥 非常勤講師

田中 陽 非常勤講師 玉利 伸吾 非常勤講師 藤田 和明 非常勤講師 松尾 博文 非常勤講師

武類 雅典 非常勤講師 山口 聡 非常勤講師 小栗 太 非常勤講師 2-0-0 2Q

本講義を受講することにより、日本経済の歩みや課題、企業の戦略について考えるきっかけにしてもらう。大学での研究や実験は社会でどのようなニーズがあるのか、どのような課題の解決に役立つのかという問題意識を深めていく。

現役記者が豊富な取材経験をもとに読み解くテーマ別の講義を受講することによって経済や産業に対する視野を広げていく。日本経済新聞などが掲載しているデータや記事を教材にしながら、基本的な情報収集に役立つ読み方を身につける。

教養特論：ミクロ経済学（Special Lecture: Microeconomics）

庫川 幸秀 非常勤講師 2-0-0 1Q

ミクロ経済学では、個々の経済主体がどのような動機や誘因（インセンティブ）で行動するか、その行動の積み上げの結果、社会全体でどのような状態が実現するか、を考える。この講義ではミクロ経済学の基礎的な理論、および現実の問題の理解や政策効果の分析にどのように応用できるか、について解説する。様々な経済分析の基礎となるミクロ経済学の基礎的な理論を習得すること、身に着けた知識を応用して現実に行き起きている問題に対して考察できるようになることが、本講義のねらいである。

統計学B（Statistics B）

毛塚 和宏 講師 2-0-0 2Q

推測統計学とは、得られたサンプルから母集団の特徴を捉えようとする領域である、社会調査データやビッグデータを適切に扱うためには、必要不可欠である。本講義では、社会科学のトピックを題材として、推測統計学を学ぶ。特に、社会的な不平等に焦点を当てる。

科学史B（History of Science B）

文 恒 非常勤講師 2-0-0 3Q

技術史B（History of Technology B）

河西 棟馬 講師 2-0-0 2Q

本講義の狙いは、社会ないし文化の中で技術が果たしてきた役割について、受講者が主体的に考える力を養うことにあります。ここでは（西洋中心主義の批判があることは理解した上であえて）「西洋近代技術」の歴史を中心に学んでいきます。技術の変化は歴史の展開に絶大な影響を与えてきました。例えば、蒸気船・鉄道・電信に代表される交通革命なくして19世紀の「新帝国主義」はありえませんでしたし、重化学工業の勃興は石油などの資源の重要性を大きく向上させ、当時の列強国を「持てる国」と「持たざる国」に分ち、これは第二次大戦の遠因となります。産業資本主義社会の到来が、ナショナリズムや近代帝国主義の勃興を促したこともすでに定説となっています。本講義は、そうした世界史と技術

との関わりに注目しつつ、社会・経済・文化・政治の複雑な網の目の中で技術の果たしてきた歴史的役割を考察していきます。

教養特論：大学史 (Special Lecture: History of Universities)

山崎 鯛介 教授 広瀬 茂久 特命教授 山口 雅浩 教授 多久和 理実 講師

亀井 宏行 非常勤講師 岡田 大士 非常勤講師 橋本 真吾 非常勤講師 2-0-0 1Q

私たちの学ぶ東工大とは、どのような大学か考えるための科目である。140 年を超える東工大の歴史をつくった人々とその成果にかんする講義を聴き、キャンパスの関係の地を探訪しその産み出したモノに触れ、その歴史を学び、その未来について考える。東工大の歴史を通じて、科学・技術の専門家をめざす東工大生が、日本の科学・技術の未来について、それぞれに考える。

科学技術社会論・科学技術政策 B (Science and Technology for Society B)

調 麻佐志 教授 2-0-0 1Q

科学者の社会的責任とは何だろうか。今後の科学技術のガバナンスはどうあるべきか。専門家と市民の科学コミュニケーションはどうあるべきか。さまざまな事例をもとに考えるのが本講義である。将来の自らの研究成果の社会への影響に関心のある理系の学生、そして自然科学の個別の学問領域を越えて、外交や国際関係、法律そして社会制度の関係する複合領域の問題（科学技術のガバナンス）に関心のある文系の学生、双方に開かれている。

本講義のねらいは、

- (1) 自らの研究成果が社会へ与える影響に関心を持つ人材を育成する
- (2) 外交や国際関係、法律、そして社会制度などが関係するような複合領域の問題に対するアウェアネスを高めることである。

科学技術倫理 B (Ethics in Engineering B)

眞嶋 俊造 教授 2-0-0 4Q

科学技術と社会・環境との関係を、戦争というフィルタを通して歴史的・多面的に考察し、現代の高度科学技術社会における科学者・技術者、そして社会の構成員として重視すべき価値を探究する。具体的には、個々の戦争や戦闘の道徳的許容可能性を判断・評価するツールとして「正戦論」を理解し、用いることによって、戦争と平和、そして様々な暴力の諸相を倫理学の視座より検討する。

科学哲学 B (Philosophy of Science B)

東 克明 非常勤講師 2-0-0 3Q

前提が真であるとき結論も必ず真となる推論を、演繹的推論という。演繹的推論は 20 世紀に形式化され、大いに進歩した。今日、形式化された演繹的推論を扱う学問は、論理学と呼ばれる。本講義は論理学の入門的講義である。前半では命題論理を、後半では述語論理を扱い、それぞれの形式言語、日本語文の形式化、推論規則と演繹、意味論、そして完全性や健全性といったメタ論理について学習する。

論理学は、コンピュータの正確な理解にとって不可欠である。また、そのような実践的側面に加え、論理は人間そして科学の合理性に不可欠な要素である。本講義では論理のエッセンスを学び、論理に関わる問題について、技術的内容を伴った理解ができるようになることを目指す。

意思決定論B (Decision Making B)

猪原 健弘 教授 2-0-0 1Q

競争的意思決定状況を数理的に扱うための理論である非協力ゲーム理論の基礎と、そこから派生したさまざまな理論を、ディスカッション、グループワーク、講義、演習を通じて取り扱う。

非協力ゲーム理論の基礎的枠組みとしての「標準形ゲーム」、「展開形ゲーム」、「繰り返しゲーム」、そして、非協力ゲーム理論から派生した理論である「メタ ゲーム理論」、「コンフリクト解析」、「ハイパーゲーム理論」、「ソフトゲーム理論」についてのさまざまな概念の数理的な定義と分析方法を与えることで、各枠組みや理論の特徴を理解させることが本講義のねらいである。

社会モデリングB (Social Modeling B)

未定 2-0-0 4Q

言語学B (Linguistics B)

山元 啓史 教授 佐藤 礼子 准教授 森田 淳子 准教授 1-1-0 2Q

言語に向き合う経験を積んだら、次は、ことばを分析してみよう。どうしてことばの使い方にはルールがあるのか、ルール（文法）を（意識的には）知らなくても話ができるのはなぜか、ルールを知っていても外国語になると母語のように話せないのはなぜか、文法、語彙、意味、それぞれには、まだまだ知らないルールがたっぷり含まれている。それをみんなでディスカッションしながら、見つけてみよう。きっと誰かに話してみたくなるだろう。

教養特論：身体教養科学 (Special Lecture: Physical Activity)

高橋 将記 准教授 福岡 俊彦 教授 田中 英登 非常勤講師 藤平 杏子 非常勤講師
2-0-0 2Q

身体や身体活動は我々の日常生活を支える重要なものである。本講義では、身体に関わる様々な現象・事象を紹介し、それらの意義や、背後にある生理的・工学的・心理的・社会的なメカニズムについて考えてみる。

身体や様々な活動に人知の及ばない素晴らしさがあることを確認し、それらの意義を考え、メカニズムを紐解く一助としたい。

教養特論：科学とヒューマニズム (Special Lecture: Science, Literature, and Humanism)

BEKTAS YAKUP 助教 2-0-0 3Q

科学とヒューマニズム：宮沢賢治のヒューマニティと幸福について

このクラスは、日本の有名な作家で詩人である宮沢賢治(1896-1933)の技術と文学、ヒューマニズムに焦点を当てる。短い生涯で賢治は、百あまりの短編、多くの哲学的な詩を創作した。最もよく知られた『銀河鉄道の夜』(1933)に始まりあまり知られていない物語の中でも、無私の心および苦痛と貧困の救済、感謝を強く描いている。「真の幸福」—幸福を得るために他者を助ける—方法は、賢治の作品とその生涯で見られるもっとも重要な考えである。賢治にとって、無私の心で他者を助けることは、本質的であり、人間であるための手段であった。それは我々を、他の動物とは異なる人間にするための手段だった。彼の最もよく読まれている詩「雨ニモマケズ」は、このヒューマニズムのあり方を美しく表現している。

賢治の考える理想的な科学と技術は、賢治のこの見解の一部である。彼の描く技術者と科学者は、独学の博愛主義者であ

り、他者を助ける深い道徳的義務を感じている。『グスコブドリの伝記』(1932)で、賢治は未来の故郷イーハトーブをイメージしている。そこでは、火山の噴火、地震、干ばつ、気候変動、そして飢饉などの自然災害の脅威を根絶するために、科学と技術が利用される。主人公のブドリは、独学の勤勉な技術者である。他者の幸福のために無私の精神で働き、それにより「真の幸福」に到達する。純粋な博愛主義者としてのブドリを、賢治は支持する。ブドリは、噴火による破壊からイーハトーブを救うために、進んで命を犠牲にしたのである。

各時間、「農民芸術」から菜食主義にわたる賢治の考え方のそれぞれの側面について議論する。また、彼の道徳的な視点から、仏教の立場、特に日蓮宗を検討する。一方、賢治の思想、文学、執筆に影響を及ぼした作家—ジョン・ラスキン、ウィリアム・モリス、エマーソン、トルストイ、ルイス・キャロル—についても考察する。

目的:

文学がどうヒューマニズムを育てることができるか、科学と技術と工学にどう社会的道徳的使命を与えることができるか、について示す。賢治の、深く道徳的で人道的な物語と思考を通して、若い科学者、技術者に刺激を与え、勉学の目的と意味を探る手助けをする。美しい散文のスタイルと感情表現を、学生たちに紹介する。(英語開講科目)

教養特論:生物学史 (Special Lecture: History of biology)

矢島 道子 非常勤講師 2-0-0 1Q

この授業では古代から現代に至る生物学や地質学の歴史を通して概観してゆく。古代から現代に至る科学の歴史をたどってゆくと、16, 17 世紀からだんだんと近代化され、現代化されていくのを理解する。特に生物の進化をどのように考えていたかについて力点を置く。さらに、それぞれの時代で科学が社会の中でどんな位置にあったかも理解する。また、女性が科学の中でどんな位置にあったかということも考えていきたい。こうした試みをつうじて、科学の時間軸(歴史性)と空間軸(社会性)を形成し、科学の「いま」への理解を深めていく。

未来社会論 B (Studies on Future Society B)

治部 れんげ 准教授 2-0-0 4Q

本講義では、社会的性差、すなわちジェンダー平等の観点から未来を考えます。近年、G20 や G7 などの多国間枠組みにおいて、ジェンダー主流化と持続可能な経済発展を結び付ける考え方が定着し、成果文書も数多く発表されています。

近い将来、海外留学したり、出張などビジネスで海外とやり取りをしたり、学会発表をする可能性が高いみなさんが、知っておくべき「教養としてのジェンダーの知識」を身に着けます。SDGs ゴール5にある「ジェンダー平等を実現する」に基づき、地域、家庭、教育、企業、政治の各分野でジェンダー平等が実現した未来について考えます。

哲学 C (Philosophy C)

山本 貴光 教授 2-0-0 3Q

「哲学」といえば、プラトンやデカルトやヴェイユといった過去の偉大な哲学者たちが考えたことを知識として学ぶ、というイメージがあるかもしれません。他方で哲学とは、誰もが試したり取り組んだりできる営みでもあります。では、自分でも「哲学」をしてみるにはどうしたらよいのでしょうか。過去の哲学者たちが考え、書いたものをよく読んで検討してみる。遠回りに見えるかもしれませんが、これこそが近道です。例えば、自分で料理やプログラミングをできるようになるには、誰かが考えて書いておいてくれたレシピや解説書をお手本に練習や試行錯誤を繰り返す必要がありますね。同じように、哲学をするためにはトレーニングが必要です。この講義では、古いものから新しいものまで、具体的なテキ

ストを読みながら、哲学のトレーニングに挑戦してみます。

芸術C (Arts C, Esthetics C)

伊藤 亜紗 准教授 2-0-0 2Q

本講義は、科学技術を用いたさまざまなアート表現を学びながら、実際に自分の作品の制作を行います。制作のテーマは「ドラえもののひみつの道具を実装する」。アートを手段として、社会に問いを投げかける方法と可能性を学びます。

文化人類学C (Cultural Anthropology C)

上田 紀行 教授 2-0-0 2Q

「苦悩と解放の人類学」-人間は誰もが幸せになりたいと望んで生きている。しかし私たちは多くの苦悩に直面しながら生きる存在でもある。

人間にとっての苦悩とはいかなるものか、文化が違えば苦悩の形も違うものなのか、それとも人類に共通の苦悩の形があるのか。日本社会に特有の苦悩はいかなるものなのか。そうした人間にとっての苦しみを前半では扱う。

後半ではその苦悩からの解放を論じる。私が長年論じてきた、人間にとっての「癒し」とは何か。宗教は人間の解放を導くのか。祭や儀式などのパフォーマンスの開く世界はいかなるものか。人間はなぜアートを必要とするのか。

様々な文化における苦悩の形、そしてそこからの解放の形を知ることは、人生にとって有益な体験となることだろう。また講義形式だけではなく、参加型のワーク、ディスカッション等も頻繁に行われるので、活発な参加が期待されている。

文学C (Literature C)

磯崎 憲一郎 教授 2-0-0 2Q

本講義では、学生が短編小説を執筆し、授業内で発表・批評し合う。

初回・第2回の授業で担当教員自身の小説観や執筆法、過去に発表した作品について説明した上で、第3回目以降は学生自らが執筆した短編小説を授業内で発表・批評し合う。議論の中で、「創作の楽しさ・難しさ」を共有すると同時に、「小説に内在する力」や「小説を生成する原理」、更には芸術作品を生み出すために必要な「創造的思考」「オリジナリティー」についても考える。

歴史学C (History C)

福留 真紀 准教授 2-0-0 4Q

この講義のテーマは、日本の対外関係史です。取り扱う時代は中近世です。

このころの日本の外交のかたちについて、考えてみたいと思います。

宗教学C (Religion C)

弓山 達也 教授 2-0-0 1Q

本講義では日本人の死生観を理解することを目的とする。そのため世界的に有名な日本映画を取り上げ、小レポートや議論によって、その映画に見られる死生観を見極めていく。扱う映画は滝田洋二郎監督「おくりびと」、加藤久仁生監督「つみきのいえ」(2008年)、小津安二郎監督「東京物語」(1953年)、北野武監督「HANA-BI」(1998年)である。

教養特論：日本思想史 (Special Lecture: Intellectual History in Japan)

畑中 健二 助教 2-0-0 1Q

過去から現在の、日本に展開した思想について論ずる（「そもそも『日本』とは、『思想（史）』とは何か？」も議論の対象に含まれる）。講義全体の視点となるテーマを一つ定め、それに沿って歴史上のいくつかのトピックに焦点をあてる。

「日本思想史」という領域には、多くの文化研究や地域研究と同様に、「これを学べばこと足りる」というような特定のディシプリンは存在せず、代わりに個々の主体的取り組みとその対話があるといってもよい。そこでは、したがって、当たり前のこととしての領域横断的な学修と、互いの研究を理解・批判するコミュニケーション能力が求められることになる。

こうした特性をリベラルアーツの一環としての本講義にも活かし、日本の思想・歴史に関する理解の深化を通して、既存の枠組みに囚われすぎないような、広く応用可能な思考力を身につけることをねらいとする。

教養特論：オンライン学習コース概論（Special Lecture: Introduction to edX online course creation）

CROSS JEFFREY SCOTT 教授 1-0-0 1Q

（英語開講科目）

教養特論：オンライン学習コース制作実習（Special Lecture: Introduction to online course video creation）

CROSS JEFFREY SCOTT 教授 0-1-0 2Q

（英語開講科目）

教養特論：都市の表象（Special Lecture: Urban Space in Literature and Cinema）（2022 年度は休講）

木内 久美子 准教授 1-0-0 3Q

近代化の発展とともに、世界は急激な都市化を遂げてきた。この過程で人々の「日常生活」（ルフェーブル）のあり方や、人々が都市に対してもつイメージはどのように変化してきたのか。都市生活や都市空間を描出した文学作品や芸術作品をとおして、これらの点を明らかにしつつ、都市化に伴う今日の社会問題についても、授業内のディスカッションを通して議論する。（英語開講科目）

教養特論：都市（Special Lecture: Urban Space for the Future）（2022 年度は休講）

木内 久美子 准教授 1-0-0 4Q

未来都市像はどうあるべきか、また科学者はその実現のために何ができるのか。毎週のリーディング・ディスカッション課題をとおして、参加学生がそれぞれの専門領域についての知識を共有しながら、未来都市像をつくりあげていく。授業はワークショップ形式で行われる。（英語開講科目）

表象文化論 C（Studies of Culture and Representation C）

北村 匡平 准教授 2-0-0 2Q

私たちの日常生活はかつてないほど「映像」に取り囲まれている。映画やテレビだけではなく、ワンセグや PC、モバイルや電子広告など「スクリーン」は日常に遍在し、私たちはなかば無意識に映像が作り出す〈意味〉を受け取っている。だが、常に身近にある「映像」は、その親しみやすさゆえに、いかに私たちの情動に作用しているのかを思考する態度を希薄化させている。

本講義では、映画を中心とした視聴覚メディアの独特な表現形式を理解したうえで、なぜその表現が人びとを魅了するのかを探究していく。そのために映像を演出、撮影、編集、音響／視覚効果、演技などの構成要素に分解し、多角的に表

現技法を捉える。取りあげる映像は、ハリウッド映画や日本映画、ヨーロッパの映画が中心となるが、アニメーション映画やドラマの表現も適宜、参照する。この授業では、①20世紀の映像表現の多様性を理解すること、②映像作品を批評する力を養うことを目標としている。一方的な講義ではなく、映像表現を思考する時間を設けるので、積極的な参加が求められる。

人間文化論 C (Human Studies C) (2022 年度は休講)

未定 2-0-0 2Q

この講義では、人間にとってもっとも根源的な問題である「生と死」あるいは「生きがい」「いのち」とは何かをめぐって考察を深める。哲学者、芸術家、詩人、さらには医師たちの言葉にふれながら、科学が捉える生命現象には収まりきらない、多くのひとびとが「生きがい」「いのち」と呼んできたものをめぐって考察するところからはじめ、それを他者と分かち合い、未知なる者たちに語りかけ得る文章を書けるようになるまでたどり着くことを目的としている。

本講義では情報としての知識の習得の優先順位は高くない。参加者の主体的な問題追究の態度が求められる。

随時、執筆、ディスカッション、プレゼンテーションも取り入れて行う。

教養特論：日本伝統芸能と音楽（能と狂言）

(Special Lecture: Traditional Japanese Theater and Music (Noh and Kyogen))

安納 真理子 准教授 1-0-0 3Q

本授業は、ユネスコの無形文化遺産として登録された日本の古典伝統芸能の能と狂言に焦点をあてる。具体的には、これらの芸能がどのような歴史的背景の中で生まれ、他の芸能に影響され、または影響をし、現代の形に辿り着いたかを明らかにする。授業では、学生たちが前もって読んだテキストの小テストを行い、またディスカッションをし、それを土台として、ビデオ映像や音源を通して様々なジャンルを分析する。囃子や謡・仕舞の口頭伝承も体験する。毎回の授業参加や小課題に加え、期末テストも実施する予定である。

授業のねらいは、伝統芸能を楽しみ、伝統芸能の知識を得て、それを周りに伝えることである。また、古典芸能の定められた「枠」の中で、演奏者や演者がどのように個性を出しているかを理解し、古典芸能を「生きている芸能」として楽しんでもほしい。

(音楽の知識や背景は必要ありませんが、英語のアカデミックなテキストを読み、それについて議論するので、中級レベルの英語は必要とします。)

(英語開講科目)

教養特論：日本伝統芸能と音楽（歌舞伎と文楽）

(Special Lecture: Traditional Japanese Theater and Music (Kabuki and Bunraku))

安納 真理子 准教授 1-0-0 4Q

本授業は、ユネスコの無形文化遺産として登録された日本の古典伝統芸能の歌舞伎と文楽に焦点をあてる。具体的には、これらの芸能がどのような歴史的背景の中で生まれ、他の芸能に影響され、または影響をし、現代の形に辿り着いたかを明らかにする。授業では、学生たちが前もって読んだテキストの小テストを行い、またディスカッションをし、それを土台として、ビデオ映像や音源を通して様々なジャンルを分析する。囃子の口頭伝承も体験する。毎回の授業参加や小課題に加え、期末テストも実施する予定である。

授業のねらいは、伝統芸能を楽しみ、伝統芸能の知識を得て、それを周りに伝えることである。また、古典芸能の定められた「枠」の中で、演奏者や演者がどのように個性を出しているかを理解し、古典芸能を「生きている芸能」として

楽しんでほしい。

(音楽の知識や背景は必要ありませんが、英語のアカデミックなテキストを読み、それについて議論するので、中級レベルの英語は必要とします。)

(英語開講科目)

教養特論：ジェンダー・セクシュアリティと文化批評 (Special Lecture: Gender, Sexuality and Cultural Criticism)

羽生 有希 非常勤講師 2-0-0 1Q

この講義では、フェミニスト・クィア・スタディーズにおける基本的な概念やトピック、議論を概観する。この際、とりわけインターセクショナルな分析の重要性に焦点をあてる。

そうすることで、ジェンダーやセクシュアリティが私たちの生活に密接にいかに関わるかを理解し、フェミニスト・クィア・スタディーズの視座から文化的事象を分析できるようにする。

コミュニケーション論C (Communication C)

高尾 隆 教授 2-0-0 3Q

演劇、音楽などのパフォーマンスアートをととした実践的コミュニケーション教育です。インプロ (即興演劇)、音楽 (歌・合唱)、ダンスなどのワークショップで、コミュニケーションゲームやアクティビティをととして、頭と身体を動かし、受講生同士がかかわり合いながら学んでいきます。ねらいは即興的、身体的なコミュニケーション能力を育むことです。受講にあたってこれまでの演劇等の経験はまったく必要ありませんが、積極的な参加とかかわりをおねがいします。

法学 (憲法) C (Law (Constitutional Law)C)

上田 宏和 非常勤講師 2-0-0 4Q

本講義では、われわれの社会的、政治的、精神的、文化的な日常生活に憲法がどのように深く関わっているかを日常生活の中で接するさまざまな事象を取り上げながら、憲法の全体像を明らかにしていく。その際、学説と主な判例の紹介も丁寧に行い、日本史や世界史などの高校までの学習との接続を強く意識し、できるだけ分かりやすい形で憲法的な見方や考え方についての理解を深めていく。憲法の基本原理をおおむね理解した上で、身の周りで生じるさまざまな憲法問題を自分自身で考える力を涵養することをねらいとする。

法学 (民事法) C (Law (Civil Procedure Law) C)

金子 宏直 准教授 2-0-0 4Q

民事裁判の手続法として、民事訴訟法、民事執行法等を学習する。弁理士試験科目などの民事訴訟法に該当する。

本科目の目的は、社会の中で必ず発生する紛争を、裁判によりどのように解決することができるのかを、民事訴訟法を学習することにより理解することにある。民事裁判制度がどのような仕組みで、どのような法理論により組み立てられているのかを理論的に学習することができる。民事紛争解決には裁判だけではなく代替的紛争解決手続の学習、民法で学習した権利義務が裁判ではどのように取り扱われるかを学習することができる。(英語開講科目)

法学 (民事法・知的財産権) C (Law (Intellectual Property Law) C)

°金子 宏直 准教授 太田 昌孝 講師 田川 陽一 准教授 東田 潔 非常勤講師

菅野 智子 非常勤講師 井口 加奈子 非常勤講師 岡本 守弘 非常勤講師

小川 憲久 非常勤講師 小倉 秀夫 非常勤講師 田中 園子 非常勤講師

土佐 信道 非常勤講師 2-0-0 3Q

東京工業大学で知的財産法を体系的に学習することができる唯一の科目である。東工大 0B や知的財産実務で活躍する弁護士等の専門家も加わり、基礎的な内容から実践的な内容へのつながりを、民法の財産法から各知的財産法まで順次学習していく。担当予定（金子宏直、田川陽一、太田昌孝、菅野智子、井口加奈子、岡本守弘、小川憲久、相山敬士、小倉秀夫 その他）。平成 27 年度までの総合科目「先端科学技術と知的財産権」の後継科目である。複合領域コース「科学技術と知的財産権コース」科目である。

研究者、エンジニアを将来のキャリアに予定している学生の方も多いと思われるが、研究や製品開発を行うには多額の資金が必要になる。こうした資金を獲得するために重要な役割を果たすのが知的財産権（特許等）である。発明等により知的財産を作り出すだけでは、資金につなげることができない。特許権などの知的財産権を取得し、それを有効に利用することが必要になる。この知的財産権の取得、利用活用に携わる主な専門職が、弁理士である。東工大の卒業生には多くの弁理士が活躍している。弁理士数（出身校別平成 24 年統計）によると東京工業大学 47 名（全 837 名中）5.8% にも及ぶ。科学技術と知的財産権の関係について理解を深め、科学者、技術者として必要な知識を深めるとともに、弁理士などを目指す学生にも有益な学習の機会を提供することが狙いである。

政治学 C (Political Science C)

中島 岳志 教授 2-0-0 1Q

近代日本の政治・外交とナショナリズムの関係について講義する。特に精神史の観点を導入し、日本が積極的に全体主義へと傾斜して行った過程を論じる。明治国家は「一君万民」をテーゼとし、王政復古による封建制打を目指したが、誕生した政府は一部の藩出身者が行政を独占する藩閥政治だった。この体制に対する「第二の維新」を目指す武装闘争・言論闘争が、超国家主義の源流を生み出す。さらに明治後期に入ると、富国強兵・殖産興業といった国家目標に自己同一化できない悩めるエリート青年（煩悶青年）が登場し、精神史上、新しい時代を迎える。そして、彼らの中から昭和維新テロ・クーデターを主導する超国家主義者が誕生する。本講義では文学作品や社会現象も分析の対象とすることで、「八紘一宇」というヴィジョンに人々が魅かれて行ったプロセスを論じる。このプロセスを辿ることは、現代日本を相対化することに通じる。講義では、現代社会への視座を意識し、歴史の中から問題の本質を抽出する方法を論じる。

本講義のねらいは 3 つある。一つ目は、近代日本政治が歩んだ道筋を的確に把握すること。二つ目は日本が全体主義へと傾斜して行ったプロセスを説明できるようになること。三つ目は、超国家主義者となっていた人物の内在的批評を通じて、現代社会と共通する不安の問題を考察すること。この能力を身につけることによって、現代日本の政治を論じる視座を獲得する。

国際関係論 C (International Relations C)

川名 晋史 准教授 2-0-0 1Q

本講義では、国際関係を捉える基本的な理論枠組であるリアリズム、リベラリズム、コンストラクティビズムについて考察していく。そしてそれらを第二次世界大戦後の具体的な事象の説明に適用し、理論の射程と限界を明らかにすることで、国際関係の構造と多元性を炙り出そうとする。

そのねらいは、第一に、複雑な国際関係を理解するための相対的な視点を養うことにあり、第二には、理論と実際の反復作業をつうじて、応用範囲の広い問題解決型の思考を形成することにある。

心理学 C (Psychology C)

永岑 光恵 准教授 2-0-0 2Q

本講義では、ストレス科学を主に心理生理学的側面から取り上げる。避けたい、減らしたいと考える「ストレス」につ

いて、ストレス科学の歴史から振り返り、最新のストレス研究成果を紹介する。また、体験的にいくつかのストレス軽減方法も講義内で行う。

講義を通して、ストレスやストレス管理に関する新たな考え方を獲得し、日常生活に活かせるようにすることを目的とする。

社会学C (Sociology C)

西田 亮介 准教授 2-0-0 1Q

本科目は、日本社会の民主主義とその啓蒙プロセス、それらの課題と展望を検討する。とくに、投票年齢の引き下げと市民性教育を取り扱う。

さらに日本社会が民主主義や政治に向き合った/向き合わざるをえなかった時代の知見を、現代の、そして今後の日本の民主主義の維持、発展にどのように活用するかという問いを検討する。

経済学C (Economics C)

江原 慶 准教授 2-0-0 4Q

本講義では、マルクス経済学に基づく資本主義の基礎理論の後半を扱います。まず、労働という人間の活動の特徴を一般的に分析したのち、資本主義のもので労働のあり方について考察します。続いて、生産という概念についてより詳しく学びます。特に、社会的再生産という捉え方と、労働市場の構造に立ち入って考察します。その後、それまでの生産についての理解を前提に、それを処理する市場のしくみについて、価格機構に焦点を当てて考えます。その上で、取引所などを備えた資本主義の市場組織についてまとめ、最後に、資本主義の基礎理論の総まとめとして、景気循環の理論的考察を行います。

本講義のねらいは、世界で最も厚い研究蓄積をもつ日本のマルクス経済学の成果を活かし、それをアップデートすることで、現代の労働や経済停滞などの諸問題を、資本主義社会における構造的問題として捉えることができるようになることです。社会的再生産の理論においては、科学技術の確定性やその発見が、経済（学）的にいかなるインパクトをもつものかが考察されます。

教養特論：メディア心理学 (Special Lecture: Media Psychology)

岩男 征樹 助教 2-0-0 3Q

本講義は、メディア心理学の入門編である。メディア心理学とは、日常生活の中で我々がメディアを用いていかにやり取りしているかを質的方法により明らかにする領域である。心理学では1990年代より質的方法を用いた研究が増えてきた。質的方法とは研究者が自ら現場に向かい、コミュニティに参加してやり取りし、体験を通じて実践の特徴を明らかにする方法である。それらの研究はワークプレイスの研究として始まったが、2000年代になってより身近なファンコミュニティの研究も始まった。

本講義では事例として仕事場、アニメヲタク、アイドルヲタクなどを取り上げ、ディスカッションを通じて、メディア使用やコミュニティの特徴について考察を深めていく。

それらの検討を通じて、メディア心理学の基本的な考え方について理解を深めると同時に、他者と関わりながら学術的知見や経験、理論を踏まえて、自分なりの意見や解決法を導き出す力を身につけていく。

メディア論C (Media Studies C)

柳瀬 博一 教授 2-0-0 2Q

本講義では、現代メディアの基礎教養を学んだ上で、「理系の仕事」としてのメディアビジネスについて考察する。

一般にメディアビジネスは、放送番組の制作、新聞記事の取材執筆、書籍の編集、小説の執筆といったメディアコンテンツを作ること、文系や芸術系の仕事、と認識されやすい。けれども、こうしたコンテンツを支えるメディアそのものは基本的に理系の仕事で成り立っている。出版は印刷技術が支えており、放送は通信技術の賜物である。テレビの基礎技術の世界最初に開発したのは、東工大の前身である東京高等工業学校の卒業生である高柳健次郎氏であり、ゲームで知られる任天堂の中興の祖、岩田聡元社長も東工大 OB のプログラマーである。

メディアコンテンツがデジタル化し、メディアの主戦場がインターネットに移ったいま、メディアビジネスは、基礎技術からコンテンツの制作にいたるまで、理系が主役となりつつある。

本講義では、メディアの基礎教養を学んだのちに、現在のメディアビジネスの最新事例をとりあげ、未来のメディアに理系の仕事はどう役立てるかを考察する。メディアビジネスの経営や制作にかかわる当事者をゲストに招く予定である。

統計学 C (Statistics C)

毛塚 和宏 講師 2-0-0 4Q

社会学や政治学の分野でもちいられる計量分析の基礎を学ぶ。統計学的思考の特質、記述統計・仮説検定・相関・様々な回帰分析（線型、ロジット、その他）の理論を学ぶと同時に、統計ソフト「R」を用いた分析手法を修得する。そのねらいは、社会・政治現象に関わるマクロデータ・ミクロデータから重要な情報を引出し、因果的推論に基づく研究手法を身に付けることにある。

科学史 C (History of Science C)

多久和 理実 講師 2-0-0 2Q

本講義は、特に実験・観測機器に注目しながら科学の歴史をたどる。

具体的には、ある機器の発展にスポットライトを当て、それぞれの段階で実現した実験・観測精度およびそれに伴う発見について解説していく。また、アリストテレスの経験に基づく演繹法や、フランシス・ベーコンの実験に基づく帰納法、そして実験主義のアカデミーの形成を学ぶことで、なぜ実験・観測を行うのか、なぜ実験・観測の結果を信頼して受け入れることができるのかを考える。

技術史 C (History of Technology C)

河西 棟馬 講師 2-0-0 3Q

本講義では、「技術 technology」及びこれと関連する概念について、歴史的な視点から検討していきます。今日日本語の「技術」の英訳としては technology が真っ先に思い浮かびますが、この言葉は 1930 年代まで英語圏ではほとんど使われていおらず、むしろ伝統的に「技術」に対応する語として用いられてきたのは art でした。また、近代日本語の「技術」は明治初期に mechanical arts（機械技芸）の訳語として使われたところに由来の一つがあります。「機械技芸」は古代ローマにおいて「自由学芸(liberal arts)」の対概念として用いられるようになった言葉であり、これは古代ギリシャの techne (art) と episteme (science) という知識の分類をゆるやかに継承したものです。こうした言葉の歴史は、その言葉が用いられた社会の文化や価値観を色濃く反映しており、それは現代の「テクノロジー」や日本語の「科学技術」も同様です。ここでは、概念史というアプローチによって「技術」およびこれと関連する諸概念（「科学」「イノベーション」など）に迫っていきます。

科学技術社会論・科学技術政策 C (Science and Technology for Society C)

調 麻佐志 教授 2-0-0 2Q

科学技術社会論の問題にクリティカルシンキングを適用して考える訓練を行う。そのために多面的な理解が求められる複雑なトピックを取り上げ、一回はそのトピックに関する概略を講義し、もう一回は学生間のディスカッションに当てて授業を進める。

本講義の狙いは、

(1) 科学に対して批判的な見方を論理的に表現すること

(2) クリティカルシンキングの技法を使うことを

を経験し、学ぶことである。

科学技術倫理 C (Ethics in Engineering C)

眞嶋 俊造 教授 2-0-0 4Q

科学技術と社会・環境との関係を歴史的・多面的に考察し、現代の高度科学技術社会における科学者・技術者として重視すべき価値を共有する必要性を理解する。科学者・技術者が直面する可能性のある倫理問題を疑似体験し、倫理的意思決定の手法を学ぶ。科目全体を通して、「やってはならない」ことを強調する予防倫理だけでなく、科学者・技術者として「何ができるのか」を考える志向倫理を重視する。また、倫理的科学者・技術者が、社会の福利に貢献するだけではなく、自らの「よく生きること (well-being)」を高めることができることを理解する。加えて、組織において科学者・技術者がいかに行動すべきかを検討する。責任ある研究・開発活動も、本科目の重要な要素である。

科学哲学 C (Philosophy of Science C)

小山田 圭一 非常勤講師 2-0-0 1Q

科学についての哲学的問題には様々なものがある。科学の目的とは何か、科学の対象とは何か、科学の方法とは何か、科学的知識とは何か、科学とは何か、などの一般的な問題がある一方、物理学や化学、生物学などの個別科学においても哲学的に考察すべき問題が多々ある。本講義では、そうした様々な問題のいくつかについて、その背景とそれに対する既存の見解を紹介し、それらをできるかぎり理論的・体系的に考察する。その上で、最善の解答あるいはこれまでもよりも良い解答があるかを探りたい。

科学に携わる者が、何を対象に、どんな方法で、そしてまた何を目的として科学的な実践を行うのか、そうしたことについて素朴に考えるだけでなく、より厳密かつ整合的な考察が可能になるよう、観点、問題、材料を提供し、それらを基に科学についてより深く考察するための普遍的な素養を身に付けることを目的とする。

意思決定論 C (Decision Making C)

猪原 健弘 教授 2-0-0 2Q

集団意思決定状況を数理的に扱うための会議の理論の基礎概念を、ディスカッション、グループワーク、講義、演習を通じて取り扱う。具体的には、「シンプル ゲーム」、「会議」、「提携の強さ」、「会議のコア」、「整合的な提携」、「意思決定主体の許容範囲」、「許容ゲーム」、「提携の望ましさ」、「安定な提携と安定な代替案」、「仮想許容範囲」、「後悔のない代替案」、「会議のコアの特徴づけ」を検討する。

会議の理論の基礎概念を理解し、それを他者に伝える能力を涵養することが本講義のねらいである。

社会モデリング C (Social Modeling C)

大堀 耕太郎 非常勤講師 穴井 宏和 非常勤講師 2-0-0 1Q

本講義では、複雑な社会課題を理解し、解決するための方法論について解説する。具体的には、ゲーム理論、メカニズムデザイン、複雑ネットワーク分析、マルチエージェントシミュレーションなどの人間の心理や行動を扱う理論と方法、さらには社会課題の解決に有用な人工知能 (AI) 技術について解説する。

社会システムのモデリングから施策や制度の設計および評価、という社会システムデザインに関する一連のプロセスについて理解することが本講義のねらいである。

言語学 C (Linguistics C)

赤間 啓之 准教授 山元 啓史 教授 1-1-0 1Q

言語学 C では脳神経言語学を中心に、関連する認知言語学、統計言語学(自然言語処理)まで概観する。脳の構造・機能を通じて言語を捉えようとする科学の歴史から説き起こし、先人達がどのような測定方法で言語機能の神経基盤を解明してきたか、特に機能的磁気共鳴画像法 (fMRI) に重点を置きつつ紹介する。現代言語学の重要なテーマである、言語習得、多言語併用、言語障害(失語症)、意味処理、記憶・知覚・運動・情動などについては、基本から最近の研究動向まで紹介する。また脳神経言語学の研究に必須な計算プログラミングについて、導入的な解説を行う。

学生は言語と脳についての科学に触れることで、人間に関する教養と研究の基本的スキルを身につけることで、この研究分野の楽しさ、難しさに気づくことができる。人間理解が深まることで、高度な情報社会、科学技術社会で生きてゆく際に自分にとっての羅針盤を作る上で一助となりうる。

教養特論：人間関係論 (Special Lecture: Human Relations)

齋藤 憲司 教授 安宅 勝弘 教授 高田 純 特任講師 2-0-0 3Q

本講義では、現代社会における人間関係の諸相や社会と人間において生じる様々な課題に、臨床心理学および精神医学的観点からアプローチする。人間科学、精神科学に独自の的方法論とその思想、理念を論じるとともに、対象となる人間の多様性を紹介する。各種資料を用いながら、人間のあり様および関係性について検討し、出席者とともに考察を進めていくことで、科学的・客観的な思考に加えて、個別性や主観性をも尊重しうる態度を構築していくことをめざす。具体的には、青年期にある自身を振り返り、どのような人間関係の中で育ち、支えられ、時に葛藤してきたかを臨床心理学の見地から検討・考察するとともに、現代社会の大きな関心事である「こころの健康」について、精神医学の立場から多角的に考えていく。

本講義のねらいは、ひとつには、よりよい理工人としてのあり方と対人ネットワークづくりについて実習を通じて修得していくことであり、もうひとつには、人間関係、すなわち他者や社会との関わりという観点についての洞察を深めていくことである。

教養特論：環境 (Special Lecture: Environment)

中野 民夫 教授 2-0-0 4Q

地球環境問題をはじめ現代社会には深刻な課題が山積みだが、これらの諸問題に向き合い、各人なりに少しでも良い方向へと動いていく力は、どのように得られるのだろうか。「誰かにやってほしい」という受動的な希望ではなく、自ら創りたい未来を描き参画していく積極的な希望、「アクティブ・ホープ」を育みたい。アメリカから世界に広がったジョアンナ・メイシーらの「つながりを取り戻すワーク」を学び、転換期を生きる拠り所、「深いやすらぎ・大きな勇氣」を探る。

ねらいは、環境など世界の諸課題に対して、きちんと現実を見つめ、どんな時にも希望を失わずに前向きに動け、人生と社会

を豊かにする力を身につけること。

未来社会論 C (Studies on Future Society C)

治部 れんげ 准教授 2-0-0 4Q

本講義では「企業と働き方」の観点から未来の社会を考えます。最近 10 年間に、企業のステイクホルダー（利害関係者）は、株主、取引先、従業員などを超えて、責任の範囲が広がりました。これにより、グローバルに事業を展開する企業として尊敬されるには、短期的な利益の追求では立ち行かなくなりました。また、20 年ほどを振り返ると労働者の働き方が大きく変化しました。

インターネットなどの通信技術を仕事に活かすことで、多様な人が活躍できるようになったのは良い面です。同時に、新たな課題も生まれています。国際的な場で注目を集めている ESG 経営、責任あるビジネス原則という考え方、英国発祥の 30%クラブ等、最新の動きを含めて学びます。

人文学系ゼミ（自分発見、社会・文化・人間探求セッション）導入 1

(Seminar on Humanities(Culture, Society and Humanity)Introduction1)

上田 紀行 教授 0-2-0 1Q, 2Q

人文学系ゼミ（自分発見、社会・文化・人間探求セッション）導入 2

(Seminar on Humanities(Culture, Society and Humanity)Introduction2)

上田 紀行 教授 0-2-0 3Q, 4Q

人文学系ゼミ（自分発見、社会・文化・人間探求セッション）1, 3, 5

(Seminar on Humanities(Culture, Society and Humanity) 1, 3, 5)

上田 紀行 教授 0-2-0 1Q, 2Q

人文学系ゼミ（自分発見、社会・文化・人間探求セッション）2, 4, 6

(Seminar on Humanities(Culture, Society and Humanity) 2, 4, 6)

上田 紀行 教授 0-2-0 3Q, 4Q

各自が自分自身の問題意識に基づくテーマで 2～30 分くらいの発表を行い、それについてゼミ生全員でディスカッションを行います。テーマは、社会、文化、人間に関することならば何でも。これまでも、格差問題、国際援助、政治のあり方といった社会的なテーマから、恋愛、映画、サークル内の人間関係といった身近なテーマまで、様々なテーマが深く語り合われてきました。

学期中に数コマを続けての集中ゼミを数回、そして前期は夏休み中、後期は春休み中に一泊二日のゼミ合宿を行います。

自分の発表を準備し、発表することで、また他の人の発表を聞くことで、プレゼンテーション能力が格段に向上します。また多様なテーマの発表に触れることで、世界が広がり、様々な分野へのアクセスが可能になります。自分とは異なる思考法、感性を持った人たちと深く語り合うことで、自己探求が進み、また深い議論ができる仲間を作ることができます。

人文学系ゼミ（参加と協働と至福の場づくり）導入 1

(Seminar on Humanities(Facilitating dialogue, collaboration, and bliss)Introduction 1)

中野 民夫 教授 0-2-0 1Q, 2Q

人文学系ゼミ（参加と協働と至福の場づくり）導入 2

(Seminar on Humanities(Facilitating dialogue, collaboration, and bliss)Introduction2)

中野 民夫 教授 0-2-0 3Q, 4Q

人文学系ゼミ（参加と協働と至福の場づくり） 1, 3, 5

(Seminar on Humanities(Facilitating dialogue, collaboration, and bliss) 1, 3, 5)

中野 民夫 教授 0-2-0 1Q, 2Q

人文学系ゼミ（参加と協働と至福の場づくり） 2, 4, 6

(Seminar on Humanities(Facilitating dialogue, collaboration, and bliss) 2, 4, 6)

中野 民夫 教授 0-2-0 3Q, 4Q

この世に生まれた一人の人間としての幅広い成長を目指し、「参加と協働と至福の場づくり」をテーマに、学び合いのコミュニティを育みたい。

具体的に体験を通して学びたいことは二つ。ひとつは、ワークショップや創造的な対話をファシリテート（促進）する参加型の場づくりの技法。それぞれの思いや知恵を引き出し、相互作用の中で大きな学びや創造へと展開するファシリテーターのスキルとところを、身につけていく。もうひとつは、ホリスティックな人間力。身体を調え、呼吸を調え、心を調え、今ここに集中できるマインドフルネスを養う。

人文学系ゼミ（創造と思考のレッスン） 導入 1

(Seminar on Humanities(Art workshop)Introduction 1)

伊藤 亜紗 准教授 0-2-0 1Q, 2Q

人文学系ゼミ（創造と思考のレッスン） 1, 3, 5

(Seminar on Humanities(Art workshop) 1, 3, 5)

伊藤 亜紗 准教授 0-2-0 1Q, 2Q

この講義では、芸術祭等へのフィールドワークを行います。大学の教室での学びを離れ、自分の体と心を動かしながら、発想の引き出しをふやすことをめざします。本年度は、夏休みに2泊3日で、瀬戸内国際芸術祭に行きます。

人文学系ゼミ（創造と思考のレッスン） 導入 2

(Seminar on Humanities(Art workshop)Introduction 2)

伊藤 亜紗 准教授 0-2-0 3Q, 4Q

人文学系ゼミ（創造と思考のレッスン） 2, 4, 6

(Seminar on Humanities(Art workshop) 2, 4, 6)

伊藤 亜紗 准教授 0-2-0 3Q, 4Q

この講義では、冬休み中の5日間の集中講義で行い、毎日異なる課題（例：キャンパス内に異空間を作れ）に対して作品の制作を行い、その後でじっくり講評を行います。自分の体と心を動かしながら、発想の引き出しをふやすことをめざします。

人文学系ゼミ（現代宗教／スピリチュアリティ論） 導入 1

(Seminar on Humanities(Religion and Spirituality in Contemporary Society)Introduction 1)

弓山 達也 教授 0-2-0 1Q, 2Q

人文学系ゼミ（現代宗教／スピリチュアリティ論） 導入 2

(Seminar on Humanities(Religion and Spirituality in Contemporary Society)Introduction 2)

弓山 達也 教授 0-2-0 3Q, 4Q

人文学系ゼミ（現代宗教／スピリチュアリティ論） 1, 3, 5

(Seminar on Humanities(Religion and Spirituality in Contemporary Society) 1, 3, 5)

弓山 達也 教授 0-2-0 1Q, 2Q

人文学系ゼミ（現代宗教／スピリチュアリティ論） 2, 4, 6

(Seminar on Humanities(Religion and Spirituality in Contemporary Society) 2, 4, 6)

弓山 達也 教授 0-2-0 3Q, 4Q

このゼミでは宗教学の基本的な考え方を学びつつ、特に新宗教、カルト、宗教と暴力、スピリチュアリティの問題を取り上げて、理解を深めていくことを目的とする。そのためゼミでは現代宗教に関するテキストを読み、議論を行い、現地研究を実施する。

人文学系ゼミ（博物館と歴史学）導入 1

(Seminar on Humanities(Museum and History)Introduction 1)

福留 真紀 准教授 0-2-0 1Q, 2Q

人文学系ゼミ（博物館と歴史学）導入 2

(Seminar on Humanities(Museum and History)Introduction 2)

福留 真紀 准教授 0-2-0 3Q, 4Q

人文学系ゼミ（博物館と歴史学） 1, 3, 5

(Seminar on Humanities(Museum and History) 1, 3, 5)

福留 真紀 准教授 0-2-0 1Q, 2Q

人文学系ゼミ（博物館と歴史学） 2, 4, 6

(Seminar on Humanities(Museum and History) 2, 4, 6)

福留 真紀 准教授 0-2-0 3Q, 4Q

本物に触れ、現場に立つ、をモットーに、歴史学と向き合います。自ら前近代の日本にアクセスできるように、古文書読解能力を身に付けるため、ゼミでは史料の輪読にも取り組みます。また、博物館での授業を複数回行う予定です。

人文学系ゼミ（インプロ／吹奏楽）導入 1

(Seminar on Humanities(Impro and Wind Music)Introduction 1)

高尾 隆 教授 0-2-0 1Q, 2Q

人文学系ゼミ（インプロ／吹奏楽）導入 2

(Seminar on Humanities(Impro and Wind Music)Introduction 2)

高尾 隆 教授 0-2-0 3Q, 4Q

人文学系ゼミ（（インプロ／吹奏楽）） 1, 3, 5

(Seminar on Humanities(Impro and Wind Music) 1, 3, 5)

高尾 隆 教授 0-2-0 1Q, 2Q

人文学系ゼミ（（インプロ／吹奏楽）） 2, 4, 6

(Seminar on Humanities(Impro and Wind Music) 2, 4, 6)

高尾 隆 教授 0-2-0 3Q, 4Q

インプロ（即興演劇）と吹奏楽を中心としたパフォーマンスアーツを理論的、実践的に学んでいきます。インプロチームと吹奏楽チームに分かれての活動もおこないます。インプロチームではインプロや演劇について文献購読を通じて理論

的に学びつつワークショップを重ねます。吹奏楽チームでは文献講読や視聴によるレパートリー研究、楽曲分析や、指揮法実習などをします。また両チームが一緒になって音楽劇や即興音楽ワークショップもおこないます。インプロや演劇の公演、吹奏楽や即興ソングのコンサートなど、観客の前でのパフォーマンスも目指します。これまでのインプロや吹奏楽の経験は必要ありません。脚本のある演劇をやっているインプロにも興味がある、オーケストラ、合唱、楽器演奏などをやっていると吹奏楽にも興味があるといった学生も歓迎です。

社会科学系ゼミ（法学ゼミ）導入 1

(Seminar on Social Sciences(Japanese Law Study Seminar)Introduction 1)

金子 宏直 准教授 0-2-0 1Q, 2Q

社会科学系ゼミ（法学ゼミ）導入 2

(Seminar on Social Sciences(Japanese Law Study Seminar)Introduction 2)

金子 宏直 准教授 0-2-0 3Q, 4Q

社会科学系ゼミ（法学ゼミ）1, 3, 5

(Seminar on Social Sciences(Japanese Law Study Seminar) 1, 3, 5)

金子 宏直 准教授 0-2-0 1Q, 2Q

社会科学系ゼミ（法学ゼミ）2, 4, 6

(Seminar on Social Sciences(Japanese Law Study Seminar) 2, 4, 6)

金子 宏直 准教授 0-2-0 3Q, 4Q

文系ゼミ（法学等）の後継。法律学の教科書等，論文，判例・事例等をもとに議論を通じて学習を深める。

社会科学系ゼミ（政策とメディアの社会学）導入 1

(Seminar on Social Sciences(Sociology of media and governance)Introduction 1)

西田 亮介 准教授 0-2-0 1Q, 2Q

社会科学系ゼミ（政策とメディアの社会学）導入 2

(Seminar on Social Sciences(Sociology of media and governance)Introduction 2)

西田 亮介 准教授 0-2-0 3Q, 4Q

社会科学系ゼミ（政策とメディアの社会学）1, 3, 5

(Seminar on Social Sciences(Sociology of media and governance) 1, 3, 5)

西田 亮介 准教授 0-2-0 1Q, 2Q

社会科学系ゼミ（政策とメディアの社会学）2, 4, 6

(Seminar on Social Sciences(Sociology of media and governance) 2, 4, 6)

西田 亮介 准教授 0-2-0 3Q, 4Q

政策研究，メディア研究，ガバナンス研究，社会課題解決の理論と実践等について，各自の問題意識に基づき，広く学際的なアプローチで探求する。

また関連して必要な，社会学，政治学，行政学，政策研究，メディア論の文献購読を通じて，問題意識，社会科学的思考を深化させる。必要に応じて，研究，実践のプロジェクト等に取り組む。

社会科学系ゼミ（日米関係と沖縄）導入 1

(Seminar on Social Sciences(US-Japan Relations: Military Base Problem in Okinawa)Introduction 1)

川名 晋史 准教授 0-2-0 1Q, 2Q

社会科学系ゼミ（日米関係と沖縄）導入 2

(Seminar on Social Sciences(US-Japan Relations: Military Base Problem in Okinawa)Introduction 2)

川名 晋史 准教授 0-2-0 3Q, 4Q

社会科学系ゼミ（日米関係と沖縄）1, 3, 5

(Seminar on Social Sciences(US-Japan Relations: Military Base Problem in Okinawa) 1, 3, 5)

川名 晋史 准教授 0-2-0 1Q, 2Q

社会科学系ゼミ（日米関係と沖縄）2, 4, 6

(Seminar on Social Sciences(US-Japan Relations: Military Base Problem in Okinawa) 2, 4, 6)

川名 晋史 准教授 0-2-0 3Q, 4Q

在日米軍基地の問題を通して、日本の安全保障、そして国際社会が抱える問題を考察する。

授業は受講者が主体となって進められる。各人が持ち回りで、具体的なテーマについてリサーチとプレゼンテーションを行う。

ディスカッションに求められるのは建設的な「批判」である。問題点をあぶり出し、それを論理的に分析・議論する技術を養う。

社会科学系ゼミ（心理学）導入 1

(Seminar on Social Sciences(Psychology)Introduction 1)

永岑光恵 准教授 0-2-0 1Q, 2Q

社会科学系ゼミ（心理学）導入 2

(Seminar on Social Sciences(Psychology)Introduction 2)

永岑光恵 准教授 0-2-0 3Q, 4Q

社会科学系ゼミ（心理学）1, 3, 5

(Seminar on Social Sciences(Psychology) 1,3,5)

永岑 光恵 准教授 0-2-0 1Q, 2Q

社会科学系ゼミ（心理学）2, 4, 6

(Seminar on Social Sciences(Psychology) 2,4,6)

永岑 光恵 准教授 0-2-0 3Q, 4Q

現代心理学の基本的な考え方を理解し、個人の問題から社会の問題に対して解き明かしてきた重要な心理学研究の文献購読を行う。また受講生の関心に応じて、調査・実験などの演習や研究を行い、「こころ」の理解を深めていく。

社会科学系ゼミ（政治と社会）導入 1

(Seminar on Social Sciences(Politics and Society)Introduction 1)

中島 岳志 教授 0-2-0 1Q, 2Q

社会科学系ゼミ（政治と社会）導入 2

(Seminar on Social Sciences(Politics and Society)Introduction 2)

中島 岳志 教授 0-2-0 3Q, 4Q

社会科学系ゼミ（政治と社会）1, 3, 5

(Seminar on Social Sciences(Politics and Society)1,3,5)

中島 岳志 教授 0-2-0 1Q, 2Q

社会科学系ゼミ（政治と社会）2, 4, 6

(Seminar on Social Sciences(Politics and Society)2,4,6)

中島 岳志 教授 0-2-0 3Q, 4Q

融合系ゼミ（意思決定論）導入 1

(Seminar on Transdisciplinary Studies (Decision Making)Introduction1)

猪原 健弘 教授 0-2-0 1Q, 2Q

融合系ゼミ（意思決定論）導入 2

(Seminar on Transdisciplinary Studies (Decision Making)Introduction2)

猪原 健弘 教授 0-2-0 3Q, 4Q

融合系ゼミ（意思決定論）1, 3, 5

(Seminar on Transdisciplinary Studies(Decision Making) 1, 3, 5)

猪原 健弘 教授 0-2-0 1Q, 2Q

融合系ゼミ（意思決定論）2, 4, 6

(Seminar on Transdisciplinary Studies(Decision Making) 2, 4, 6)

猪原 健弘 教授 0-2-0 3Q, 4Q

受講生は、担当教員と協議して決定した意思決定論に関する課題に取り組む。文献等の調査を通じて課題に関連する事項の理解を深め、討論などを通じて問題を明確化し、解決を図る。課題に取り組むこれらの過程において、それまで学修してきた様々な科目によって身に付けた専門知識及び周辺の基礎知識等を活用して問題を解決する手法を身に付ける。また、データの取得、取得したデータの解析とその考察といった手法に習熟するとともに、複眼的に事物を観る力を養成する。さらに、得られた成果をまとめて報告書を作成し、発表・討論を行う。

融合系ゼミは、学生個々が特定の課題に取り組む研究室教育の中核をなすものであり、体系的カリキュラムに基づくコースワークと相互補完の関係にある。課題に取り組むことにより、意思決定論に関する専門力の向上とともに、新たな課題・問題を発見・設定する力、未解決の問題を解決に導く力など、社会で必要とされる総合的な開発力を身につけることが期待される。